製鐵、機械、木材等の類に屬する諸株は其等の一例であると信ずる

其他の方面

貿易に就ては輸入に片寄るから國家經濟の立場から見て悲觀である、金融は變態的でも平靜は保持することが出來る、海運は繁昌と見る、勞働問題も樂觀せらるゝ、外資の輸入は避け難いけれども將來は苦しい立場に陷る原因となる、政府の財政計畫は凡て悲觀の材料となること等である。

好況てなく活況

然し大體から見れば既に述べたるが如くに經濟界產業界は良く活動すると言ふことになるから決して悲觀すべきでも滅入るべきでも無いのである。但し茲處に注意すべきは我が經濟界の今後が震災に依つて好景氣になるものと早合點してはならない。多數の人命と莫大な富とを失つたことであり且つ巨大の負債を擔ふことになるのであるから之れに依りて生じたる經濟界の活影響を好景氣と言ふことは言葉に間違があると信ずる。從つて吾人は來るべき我が經濟界は好況と言ふよりも活況を呈すべきであると言つた方が言葉が穩當であると信ずる。但し今後に起るべき活況が何時まで續くかは問題であるけれども政府に於て調節を適當に取るならば復舊事業の存續する限り活況であらねばならぬけれども人間の欲望が其自制心を失はしめ或は永からざる以前に不況來を見るかも知れない言を換ふるならば大異變の悲しみを追想しなくてはならぬ時期が早く來ぬとも限らないが畢竟此問題は國民の自覺と自制にあることであると斷ずることが出來るのであつて若しも政府の調策や救濟が適當に行はれ國民が調子に乘ることなく自制するならば數年間の經濟界の活況は疑を入れぬことゝ言はねばならない。

國民の覺悟

之れを要するに我國は一大國難に遭遇したことであるから國民は一大決心をしなくてはならないのである。假令經濟界が今後に於て活況を見るとしても決して輕佻浮華

の氣風を釀してはならぬのである　即ち十一月十日の詔書に於ても

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニアリ、之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス、是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基キ淵源ニ遡リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ揭ケテ其ノ大綱ヲ昭示シタマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誡ヲ垂レタマヘリ、是レ皆道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ皇謨ニアラサル莫シ、爾來趨向一定シテ効果大ニ著レ以テ國家ノ興隆ヲ致セリ、朕即位以來夙夜兢々トシテ常ニ紹述ヲ思ヒシニ俄カニ災變ニ遭ヒテ憂慄交々至レリ

輓近學術益開ケ人智日ニ進ム、然レトモ浮薄放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス、今ニ及ンテ時弊ヲ革メスンハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル、況ンヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツヲヤ、是レ實ニ上下協戮振作更張ノ時ナリ振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實効ヲ擧クルニ在ルノミ、宜シク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智德　并進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ、公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尙ヒ、忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛共存ノ誼ヲ篤クシ、入リテハ恭儉勤敏業ニ服シ產ヲ治メ、出テハ一己ノ利害ニ偏セスシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ、朕ハ臣民ノ協翼ニ賴リテ彌々國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ、爾臣民其レ之ヲ勉メヨ

と宣はせられたことであり吾々は節實剛健以て此の國難を切り拔けなくてはならぬのは言ふまでも無い。即ち精神的に於ては思想を健實にし物質上に於ては節約を旨として進むべきであると思ふのである。

第二編　震災の經濟界に與ふる部分的考察

第二編　震災の經濟界に與ふる部分的考察

這般の關東大震災は我國の國難的一大損失であつて、國富の八分の一强を烏有に歸せしめた點に於て、其被害程度の如何に强烈絶大であつたかは、既に第一編中に大體の研究をなし來たのであるが、更に此經濟的一大損害の內容を部分的に檢察せんか、被害程度の甚大なるものあり、極少に止まりしものあり、或は震災の爲めに却而景氣の好轉化、又は勃興を傳へられたものあり、更に反對に逆勢の悲況に陷つたものあり、將に經濟界の大混亂期を現出せることを明瞭に考察することが出來る、以下順を追つて各種事業界に就て部分的の研究を進めることにする譯である。

第一章　紡績製絲界の影響

第一節　綿紡績の被害と將來

紡績界の直接被害

震災に依り紡績界の蒙つた被害影響は、實に甚大で、關東産業地帶の中堅は殆ど全滅的と言ふても過言では無い位で、紡績工場に與へた打擊の上より觀るも震災前の全國總錘數の約四分の一の被害を示して居るのである。左に之を紡績聯合會調査に係る各工場の蒙つた直接被害の內容に就て窺つて觀る。

紡績聯合會調査直接被害內容

社別	工場	錘數	撚絲錘數	織機臺數
大日本	全燒工場			
富士	深川	三四、三五二	九、〇四四	—
同	押上	五九、三四四	二一、一三六	—
	小山第三	四〇、〇〇〇	—	—
小計		一三三、六九六	三〇、一八〇	—
	倒壞工場			
相模	平塚	六三、八三二	一二、三五二	—
小田原	本社	三〇、七二〇	—	三〇〇
東洋	王子	五一、六八〇	一四、七八四	—
服部	横濱	一一、三〇四	—	—
	(約半數運轉不能見込、可能の分は名古屋に移轉の筈)			
鐘紡	本社第一	三〇、四四〇	—	—
富士	小山第二	五二、四七二	—	—
	(瓦斯絲紡出錘數二三、二〇〇錘英國より到着の分は直に小山第二工場に增設の筈)			
同	川崎	一一、二二四	二一、九六八	—
		三五一、六七二	四九、一〇四	三〇〇
小計				
	一部倒壞工場			
大日本	橋場	七八、〇〇〇	二五、三〇〇	小巾七五一　一五六
	(紡機八〇臺、織機七〇〇臺は近く運轉開始の見込)			
日清	第一	五二、九九六	—	三二九
富士	小山第一	三〇、一九二	—	—
	(前部完全近く英國積出太糸用一六、八〇〇錘據付の筈)			
同	同　第五	—	—	一、五六八
	(前部完全)			

東京	西新井	二〇、〇〇〇	三、六〇〇	—	
富士	小山第四	四四、二八八	—	—	
（一部燒失）					
東洋モス	本社第二	二〇、〇〇〇	—	—	
（被害輕微）					
鐘紡	本社第二	一八、五六〇	—	—	
（同上、十月上旬より運轉開始）					
同	同 第三	三四、六四〇	—	—	
（九月廿六日より一部運轉開始）					
同	同 第四	—	—	四〇二	
（十月上旬より運轉開始）					
同	同 第五	二二、〇〇〇	—	—	
（被害輕微）					
富士	小名木川	一三、八二四	—	六九二	
（被害極めて輕微既に運轉）					
日清	本社第二	三三、六三二	二五、五二〇	—	
（被害輕微、十一月より運轉）					
東京モス	綿絲工場	四八、四六四	三、六〇〇	一、六三八	
（被害は全體の約二割、八割は十一月中旬運轉開始）					

小計		四一六、五九六	五八、〇二〇	小巾七五一	四、七八五
合計		九〇一、九六四	一三七、三〇四	小巾七五一	五、〇八五

即ち今回の關東震災に依つてうけた紡績の被害は全燒三工場、十三萬三千餘錘、倒壞七工場、三十五萬一千餘錘、一部破壞十四工場、四十一萬六千餘錘であるが、尙此外の會社にて被害を受けたと傳へられたものを揭げると、東京キャリコの四萬八千四百六十四錘、內外紡の四萬五千錘等を以てして居るのである。更に此等の被害に就て番手別に區別されたものを觀るに

	全滅	全倒	部分的被害		全滅	全倒	部分的被害
廿手以下	六四、八〇〇	五三、〇〇五	八四、一四四	瓦斯糸	二九、四八〇	一〇〇、一三一	九三、三七三
卅手乃至四十二手	二四、四三四	一四一、四〇四	二九七、九〇三	合計	二〇八、七〇四	二九三、三四七	四七五、四一八

等の見積が發表されて居る、而して此三種類の合計は九十七萬七千六百六十九錘で、之を全國の紡錘數に比較すれば廿手太番八パーセント、中糸卅七パーセント、瓦斯糸五十七パーセント、全錘數の廿パーセン

トに該當し又被害紡錘の一箇月の生産能力より之を觀れば、左の如くであるとされて居る。（單位梱）

	全滅	全倒	分部的被害
太番廿手以下	三、二四〇	二、六〇〇	四、二〇七
中糸廿手以上四十二手迄	三、四三二	四、二四二	八、九三七
瓦斯糸	一五三	五二〇	四八六
合計	六、八二五	七、三六二	一三、六三〇

即ち毎月前表丈けの減産を餘儀なくせられることになる譯である。

次に紡機にして被害を蒙つたものは、小田原紡績の三百臺が燒失した外、全潰の分はないが、部分的に被害を受けたものを擧げると左の如きものである。

鐘紡第二第三第四第五工場四百二臺▲富士瓦斯小名木川六百九十二臺▲同小山第五工場千五百六十八臺▲日清亀戸第二工場三百廿九臺▲東京モスリン吾嬬工場千六百卅八臺▲東洋モスリン五百臺

紡績界の間接被害

以上は直接の被害であるが之に對し間接に影響を蒙るものもある、即ち從來横濱港より原綿の支給を受けて居た工場は、同港の潰滅其他に依り原綿の支給に就て自由なるものを得ない譯で斯くの如き影響を受くる紡績會社工場錘數は（單位錘）

	錘數	織機臺數		錘數	織機臺數
大興紡川越工場	一〇、一〇〇	—	名古屋紡郡山	八、八〇〇	—
同甲府工場	二、七二〇	—	同新潟工場	二四、七八四	—
旭紡織仙臺工場	二五、二二四	五〇〇	三光紡績	一五、〇〇〇	—
足利紡足利工場	一五、〇〇〇	三〇〇	上毛モスリン島田	二、七七四	—
東洋紡栗橋工場	六、〇〇〇	六七二			

等で此等は原綿の支給が自由ならざる爲に操業上に相當の惡影響を及ぼすことかと思はれる。原綿に就ては既に述べたるが如き狀態で多數の工場被害が短時日に復舊を觀ることが困難であるから之れも間接的に影響を蒙り其消費も或程度迄減縮せられるのは謂ふ迄もない。而して此等被害工場の原綿需要減少の推定額は（單位俵）

	全滅分	全倒工場の分	部分的被害工場の分
印度綿	三、七五八	三、〇一六	四、六二八
米綿	三、〇九〇	三、八四二	八、四〇一
埃及綿	六二	二〇八	三一五

と見積られて居る卽ち印度棉は一萬千四百二俵米棉一萬五千三百三十三俵埃及棉五百八十五俵に該當する譯である。

蓋し輸入原綿の總體から觀れば關東の需要は斯くの如く或程度迄減縮せられる譯であるけれども、一方關西に於ける綿絲の增產は免れ難いことであるから多少の緩和は見らるべきである。

被害紡績復舊狀態

震災地帶の被害紡績工場は大部分復舊狀態にある、其主なるものを左に擧げれば

東洋紡・栗橋工場は既に操業に從事し、王子工場の破壞箇所は早速復舊工事に着手したから一部は操業の筈。

大日本紡・深川工場は閉鎖する模樣で、橋場工場は紡機の大部分は使用に差支なく損傷箇所の復舊次第操業が出來る。

鐘紡は被害以外の工場は差詰の操業に左程の日子を要さない模樣である。

日清紡・龜戸工場は半潰であつたから復舊も早く且名古屋、京都工場にも主力を注ぐから影響は少ない。

富士瓦斯紡は紡績會社中被害多く小山第三、同第四、押上工場は會社は之を拋棄することゝしたが、其內の紡機で使用に堪ゆるものもあり、尙豫而英國に註文中の紡機四萬錘が既に輸入されて居るから適當の地を選んで据付工事を行ふ計畫もあり、川崎、小名木川兩工場も比較的被害程度少ないから紡機の大部分は使用し得る見込で既に工場改築に着手して居る。

其他の東京紡績、相模紡績、小田原紡績等は主力工場全滅の厄に遇ひ復舊は可成り至難であるらしいが、東京紡は日清紡との合併が愈現出となり、相模紡は關西紡績大津工場を買收して居るから之れに主力を傾注し、小田原紡は幾分三井系統を含んで居るから案外復舊も容易ならんと見做されて居るが然し此等第二流の會社は第一流會社程復舊

は迅速に行はれ難いと觀測されて居る。

紡績界の復舊と前途

中小紡績の合同は彼の操短運動開始の當時より唱導せられて居た所であるが、今回の震災に依り之が合同談は向後事實となつて急速に運ばれるであらう、殊に最近小紡績の窮狀加重に搗てゝ此等の會社にて震災被害を受けたものは當然復舊の命脈なく、且大會社では有數工場を烏有に歸せしめた折柄であり此等會社は新規に復舊費を投ずるよりは、此際既設工場を買收する方が有利であるから合同談は具體化するであらう、即ち前記の外現に富士紡の協同紡合同交渉、日本メリヤスは東洋紡糸に、今治紡績は合同紡系に何れも合同の機運を迎へ來たらんとする趨勢で紡績界整理の意味に於ても却而此合同が復舊に多大の好果を齎するに至ることを疑はぬ。

復舊は來春乎

震災厄に遭つた各社手持の原料、製品、半製品と綿絲商の倉庫にあつた綿絲、綿布の燒失合算數量は相當の多額に達し、隨而震災前の現狀恢復を望むには原料の輸送供給、並に各社被害工場の操業恢復の秩序的復舊後にあらざれば、斯業の復舊を觀るに至るまい、而して四圍の狀勢上輸送も次第に完全に向くとしても尙數ヶ月を要し工場操業の復舊亦同樣に尠くとも茲處四五ヶ月以上の時日を要すべきであるから結局紡績界の復舊は來春以後とせなければならぬことであらうと思ふ。

操業休止供給不足需要增加

何れにするも震災被害に依る各社の操業休止と、原料及製品、半製品等の燒失より來る供給不足と、更に之に加ふるに震災に因て衣類等の燒失に基く需要增加の三大原因は、當然市價の騰貴を餘儀なくすることは明かで向後需要方面に對しての懸念は尠ないことゝなる更に原綿の手當も一流會社筋には充

分であるから差當り供給に支障を來たすことはなく從つて此等の狀勢は一面に於て紡績界の復舊を早からしめ、他面に於て斯界の將來に好勢轉化を想像せしむる强材料を爲しつゝあるのである。

第二節　綿織物界の好轉

關東燒失 關西供給

綿織物は震災當時は恰も冬物仕入季で東京邊の問屋筋の多くは買入品藏積みのものが相當あつたので、此等は悉く震災の爲に全部烏有に歸した模樣であり、其上取引決濟は大抵卅日期限となつて居た關係上、機業地は直接に之が影響を受け金融の梗塞を惹起し、旁關東筋への冬物取引は一時休止の狀態となつたのである。處が關西方面は之れに反して震災が却而市場に對して强材料を與ふることになつたのである。即ち關東筋問屋手持品の燒失と一般罹災民の衣服類燒失とは畢竟其供給を關西に待たなければならぬと言ふ結果になつた譯であつて併かも取引は多く現金取引と言ふことになつた爲めに關西筋の商人は勘なからず商品が現金に代つた勘定になつたのであつて加ふるに市價の如きも震災後間もなく二割高を傳ふると言ふ有樣で要するに綿織物業界は從來の供給過剩に伴ふ機業地の困難等も將に一掃せられた譯である。

百萬反買上に活況來

其上政府は震災民の救護供給を目的とし綿織物百萬反を買上ることに決定し緊急勅令卽ち物資供給令が公布せられた爲め、左なきだに市價騰貴を傳へられた斯界は多大の好勢を招いた譯で、九月二十日に至り各府縣に向け買上げ委託の電報を發し大阪府廳に對しては晒木綿、縞木綿各三萬反、木綿裏地六萬反、綿ネル（捺染、無地）三十萬反其他の買上げ委託があつたので同府廳にては直に各同業組合に移牒の上買上に着手し其買上物は之を數回に分け發送したと云ふが如き有樣で近年稀れなる現象を呈するに

致つたのである。

實物織物尊重と産地の繁忙

震災地復興氣分の增す毎に實用織物の實需が增加して産地の遠州、尾州、播州、備後などの大量製産地では直接商人の取引申込が殺到する外當局から度々纏つた註文を受けるので所によつては二部交替晝夜兼行で製織を急いでゐる從來東京から東北へかけて盛に出る大和絣なども震災後半箇月程は輸送が杜絶してゐたが漸次回復して來て却つて以前に優る活況を呈し來つたので百萬反位は製織する希望らしく伊豫、久留米絣なども爭奪戰の渦に入つてゐると言ふ勢ひで今迄關東や東北に捌けなかつた關西の金巾綿ネル製品など飛ぶやうに賣れ、馬鹿にされてゐた京阪兩地の一反一圓二三十錢から二圓五十錢位の捺染絣も大々的に需要されてゐると云ふ有樣である。

綿織物需要增加前途

震災が與へた深甚の刺戟は尊き敎訓であつて、國民の質素と勤儉との美風を振起せしめた、而して綿織物又は實用的織物を奬勵使用することが激增し、贅澤品は之れを排斥するの時代が來た、それであるから政府百萬反買上げ即ち震災地向實需の一巡後と雖、依然として需要は更に增す一方で、平年生産過剩に陷つて居た斯界は當分之が懸念も一掃せられ、加ふるに彼の運輸恢復に次で、商取引及銀行取組等も漸次現狀に復歸するから、何んとしても綿織物界の前途は大に樂觀に値ひすることを信じて疑はぬ。

綿ネル被害高

尙ほ綿ネルの彼害額も相當額に達し、其内産地和歌山地方より東京、横濱に送荷せしもので燒失した損失額は約二百五十萬圓見當に及んで居る、隨而同地方製織家の打擊は甚しく、其上銀行の貸出嚴重の爲め、機業家は一時大部分製造を中止せねばならぬ苦しい立場にあつたのである。然るに政府の三千

萬碼買上げと燒失に依る市場品薄と尙前途需要の增勢見込なるとの原因は、茲にネル界に大に景氣を添へ、兎角生產過剩の傾きで悲勢を傳へられた斯界も茲に生產能力を增長すると云ふが如き有樣で、正に一陽來復の趣きを呈するに至つた。

ネル前途好望

質素生活の意味に於て、綿ネルの需要は益々向後增加するであらう、隨而從來よりの斯業の悲勢を轉じて、樂觀商狀を市場に現はすことは明かで、市價の如きも需要喚起の結果よりして幾割かの高値呼びを呈す可く、前途好望たるを失はぬ、されば震災に依り受けたる產地筋の被害は、遠からず之を一掃し、機業家も困憊裡より脫して、相當の利益を收むるに至るであらうと察せられるのである。

第三節　絹絲紡績の前途

絹糸紡績被害微少

實用を主とする、銘仙、紬織、糸織等を總稱して絹糸紡織と謂ふが、我國で絹糸紡績を營んで居る會社は富士瓦斯紡、鐘紡、東洋紡、日本紡、其他十數會社あるが、震災の被害を受けたのは富士瓦斯紡の神奈川程ヶ谷工場と日本ペニー會社大宮工場位のものである、其他鐘紡以外會社の工場は幸ひ被害を免れて居たので我國の絹糸紡績業の生產及前途に對し、格別重大なる支障を來さない。但し震災と同時に一時實生活の意味よりして綿織物の需要が增加せるに反比例して絹織物の前途は悲觀せられ原糸取引及製品取引とも一時杜絕の狀態であつたが、九月中旬頃より一部の問屋筋が、秩父、伊勢崎、桐生、足利、館林、結城、青梅、川越、所澤等の製品に對し買付を行ふやうになつて以來關東產織物の商談は漸次復活の機運を招致し生產地として被害を受けた、八王寺、甲州筋等にも取引を開始するやうになつたのである。斯くて原糸の取引も復活す

るに至りし爲め、罹災工場を除いた外は關東以外の米澤、越後其他靜岡以西の遠州、三河、尾州、岐阜、伊豫、久留米、播州、備後等一時金融難に陷り關東同樣操業を休止してゐた地方も共に操業を開始するやうになつたのである。

生産の減少と市價

全國の機業地が上述の如くに一時操業を中止したる爲めに九月中は關東の絹織物は前年同月に比し約六割綿織物は約八割と言ふ風に減産を告げて居るけれども所謂實主義や金融上の關係からして綿織物の如くに其市價は伸びない今震災前と十月一日との各種絹綿織物の産地相場を比較する時は次の如くである。（單位錢）

	十月一日	震災前	比較
八王子	一九、〇〇	一八、〇〇	一、〇〇高
米澤	九、七五	九、五〇	二五高
栃尾	七、〇〇	七、八〇	八〇安
足利	一〇、〇〇	九、五〇	五〇高
桐生	四、二五	四、一〇	五高
館林	二、七五	二、六〇	一五高
結城	二八、〇〇	三一、〇〇	三、〇〇安
伊勢崎	一六、五〇	一七、五〇	一、〇〇安
秩父	二一、〇〇	二〇、七五	二五高
甲斐絹	一八、五〇	一八、二五	二五高
大島紬	二四、〇〇	二四、五〇	五〇安
本大島紬	三六、〇〇	三八、〇〇	二、〇〇安
本久留米	二一、〇〇	二一、二〇	二〇安
小幅モス	二、一〇	一、九五	一五高
東京	四、〇〇	三、四〇	六〇高
遠州	一、二〇	一、一〇	一〇高
尾州	六、〇〇	六、〇〇	同事
青梅	四、〇〇	三、二五	七五高
久留米	五、〇〇	五、二〇	八〇安
伊豫	一八、〇〇	一八、〇〇	同事
金巾裏	一、二五	一、二五	同事

此の相場は震災に依つて需要に打擊を受けた當時のものであるから餘り伸々しない。然し此狀態を見て直ちに悲觀するの必要もない。一方には上記の減産に加ふるに震災燒失に基く補充的の需要もあるべきで殊に婦人用の銘仙、紬、絲織等の絹物に對する需要は增加すると共に政府筋の買上も此方面に注がれて來たことであり運輸、金融等の不圓滑に基いた斯界の不安も漸次緩和せられ銘仙、紬類の如き比較的實用向の絹絲紡績は其市價の前途も見るべきものがあると豫測せられて居る。

絹糸紡績前途樂觀

斯くの如く織物の需要は震災を一劃として茲に綿織物需要と、絹糸紡績製品たる銘仙及紬、糸織等の需要とを一層喚起するの機運に嚮つたことは、所謂國民の經濟的自覺發生に基因して居るのであるから、絹絲紡績界の前途も敢て悲觀の點を見出し得ない、況んや斯業は我國に於て根柢の強い獨得の事業として左なきだに發達すべき性質を有し、且つ常時に於ても需要は年々增加しつゝあつた譯であるから今後は上等の絹織物に對する需要が減縮するべき事情と相待つて實用本位の銘仙、紬、絲織等の絹絲紡績品に向ふべきは推測し得らるゝ處であつて斯界の前途は樂觀せられて居るのである。

第四節　比較的影響ある絹布界

絹布界と影響及前途

絹織物中上等の部に屬する京都西陣、金澤、福井の羽二重等は、震災突發と共に一般需要減少豫想と、震災地方の在荷燒失とは斯界に悲勢を傳へられ、產地筋と謂はず、販路方面を問はず一時寢入込みの狀態を呈したが、間もなく彼の燒失補充の爲めに稍々引返の商狀を現はすに至つたと云ふものゝ西陣織物の如きは向後矢張り時代影響として需要を減少し市價も兎角鈍狀氣味のものであらうと想像せられる、唯羽二重の如きは一方に海外輸出主要品たる品位を有し居り、且內地の需要とても減少するものゝみとは思はれないから、差したる影響を蒙るとは感ぜられないのであるが、要するに大體に於て實用的でなく寧ろ謂はゞ贅澤品の部分に屬する高貴の絹織物は今後一般氣風の質素普及ともならば、自然之が影響を受けて需要も減少し、景氣も沈衰するに至りはせぬかと觀ぜられるのである。

第五節　製麻界は供給不足

製麻被害程度

這回の震災に依る製麻界の被害は、日本製麻赤羽工場が九分方崩壞し、此機械、建物、什器、原料、製品等で約百七十九萬圓の損害と稱せられ、當分作業復舊の見込なき模樣で、同社浦和工場は無事ながら疊糸の製造に限られて居るから、製麻布製造會社として災害地に工場を有せぬ帝國製麻のみであるが、同社は又製品保管の倉庫四棟が燒失して居るから、此等の總損害を合算すると製麻界は我國生産の三分の一を失つたことになつた譯である。

製麻需給と前途

製麻の被害斯くの如く敢て他業の損失に讓らぬが之が爲め、市場品薄と一時の需要喚起とに追はれ、遞信省納入行囊及鐵道省貨車用被害覆等の註文各製麻會社に殺到し、其需要額のみにても、優に向後一ヶ年間の作業充當に餘るの狀態となつたのであるから、隨而忽ち市價も從前に比し、約二割高の値上げを呈し、其他家庭用麻製品の蚊帳の燒失高のみにても相當の多額に上つて居り、之が補充のみで、又尙此後一ヶ年間の生産能力百萬帖とすれば、此方の生産をも要するのであるから、製麻界は現在の減殺能力のみを以つてしては到底供給不足に陷るであらうと想像されて居る有樣である、それに其被害も復舊の期を見るまでに相當の時日を要するので、それまでは市價も高値を支持し、市況は好勢を呈し、此間製麻會社は損失を補ふた上相當の利益を收得するに至るであらうと考察せられて居る。

第六節　毛斯綸紡界の影響

モス工場被害の程度

震災が與へた毛斯綸紡界の被害も決して少くは無いのである。震災地帶に於ける工場は日本羊毛工業會加盟會社としては

東京モス、東洋モス、栗原紡織、上毛モス

等を擧ぐべく加盟會社外としては

野呂工場、栗原貞吉、大東織布、松鐵

等であるが此等の被害狀況を見るに

羊毛工業會加盟の分

社名	工場名	織機臺數
東京モス	吾嬬	一、五〇〇臺
東洋モス	第一	八〇〇
栗原紡織	横川町	四五〇
上毛モス	館林	五〇〇
同	中山	五〇〇

羊毛工業會加盟外の分

社名	工場名	織機臺數
野呂工場	品川	八〇臺
同	龜戸	八〇
栗原貞吉	——	六〇
大東織布	——	二〇〇
松鐵	川越	四〇

等で加盟會社中の東京モス、東洋モス、栗原紡織三工場は工場の全燒と製品在荷が相當上つてゐたゝめその損失莫大に上る見込であるが上毛モスの館林工場が無事であつたことゝ中山工場が全燒したとは云へモスリンの製織準備が未だ完成してゐなかつたゝめ幾分損失を免かれたやうである。それから加盟外の工場は全部潰滅狀態にあるものとせられて居る。而して影響ある被害の見込臺數は加盟會社側二千七百五十臺加盟外側七百六十臺で、之を全國の運轉臺數に比すると前者は五割、後者は約一割九分に相當する譯で之れに此等の被害工場の製品手持以外に保稅倉庫に保管せられて居つたものもあり且つ一方には此等の會社製品以外にも全國で五千臺の多きを以て數へられて居る手織機械に由つて製出されたモスリンの在庫品も加はつて居る譯であるから可なりの損害を見積られ得るのである。

生産能力と減産

今我國に於ける本年のモスリン生産高に就いて見るに地方手機に由る生産以外の各モスリン會社の生産高は左の通りになつて居るのである。

社名	上半期	下半期推算	年合計
日本毛織	八、〇六三、八一〇	八、一〇〇、〇〇〇	一六、一六三、八一〇
東洋毛織	二、二五三、四九二	二、二五四、〇〇〇	四、五〇七、四九二
東洋モス	七、三〇九、三三三	七、五〇〇、〇〇〇	一四、八〇九、三三三
東京モス	一一、〇四一、一一〇八	一一、八一〇、〇〇〇	二二、八六一、一一〇八

社名	上半期	下半期推算	年合計
栗原紡織	一、九七四、九一〇	二、〇〇〇、〇〇〇	三、九七四、九一〇
上毛モス	三、八二二、〇三〇	三、九〇〇、〇〇〇	七、七二二、〇三〇
モスリン紡織	七、二五三、九四〇	七、二五三、九四〇	一四、五〇七、八八〇
合計	四二、七一八、七二三	四二、九二七、九四〇	八四、六四六、六六三

（單位碼）

本年の會社側に於けるモスリンの生産高は八千四百萬碼の豫想で、之れに地方手機に由る生産豫想高一千萬碼以上と見て、全國のモスリン總産出高は一億萬碼と見られ、其内で輸移出量は九十萬碼位として、差引内地供給高は九千九百十萬碼となり一人當りの消費量は一千七百三十三碼の推定であつて下半期の供給過剰が見越され操短は會社たると手機業者たるとを問はず當然行はなければならなくなつて來た次第であつて結局下半期には幾分の減産が傳へられて居つたのである。

前途は繁忙

然し又他方に於ては需要季節にも向ひたる結果として幾分の樂觀に傾いて居つた矢先に丁度關東方面の震火災が突發してモスリン會社の生産上に打撃を與へると同時に、京濱罹災地に於けるストックを燒失したので供給にも不足を豫想せられ殊に大阪方面は從來東京方面から供給を仰いで居つた東北、北海道方面の注文殺到と言ふ有樣になつたのである。尤も金融の不圓滑であつた爲めに思ふ如き結果が上らなかつたのであるけれども向後金融關係の平準と相待つて斯界の活況は明かであると信ずる。唯だ茲處に注意を要するは地方手機業者が採算引合を機として操短解除から進んで增産を計るやうになつて來ないかと云ふことである。此手機業者中モス常織者の機械臺數丈けでも約四千臺はある有樣で他の大巾織機を有する手機業者がモスの生産に轉向した場合には、手機總臺數は五

千臺にも達することゝなつて、之れはモスリン會社全體の機械臺數と殆んど同數であるから、之に由るモスの增產は輕視しがたいのである尤も從來はモスの輸入原絲が安くて有利であつた爲めに、手機業者中モスの製織に轉じて居つたものが多かつたのであるが、輸入原絲が割高でモスの市價が安い場合には採算不引合で、手機業者はモスの製織を止めるのであるが現今海外の羊毛市價は强調を帶びて來て居るから手機業者方面のモス增產は一寸實現しがたいやうで供給減少見込の毛斯綸業界に於ける今後は益々繁忙であるべきと思はるゝのである。

第七節　羅紗工業の影響

品不足に陷る

震災の被害を受けた毛織物中の原物即ち羅紗類は東京府下大井町にある東京毛織工場と合同毛織工場の一部とが倒壞した位のことで被害程度は輕微である。蓋し東京横濱等の羅災地に於ける厚物製絲のストック一萬五千箱其價格一千二百萬圓內外の在庫品、日本毛織の輸送中の品物にて汐留驛にありしもの若干、毛絲の一千二百萬圓見當、羊毛トップの一千萬圓見當等が燒失したことは計算に入れなくてはなるまいと思ふのである。斯くて右被害品は大部分は輸入品で內地製品は其一少部分に過ぎぬ上に災害地所在の毛織會社には手持の製品ストックは餘りなかつた樣でもあり相待つて品不足は免かれ難い事實となつたことである。而して今後の需給關係を考察する一材料として我國內に於ける生產狀況を見るに

△羅紗類の產額

	數量(碼)	價格(圓)
大正十年度	五、三二、四三六	三一、七三六、〇四八
同十一年度	七、三四一、四五五	二七、五一四、八〇八

△毛布類產額

	數量(碼)	價格(圓)
大正十年度	一六三、九七九	一、五五六、七三三
同十一年度		一、七三一、九一九

等であつて斯くの如き國內の生產狀態では早急に其等の不足を補ふことが出來ぬのは言を待たぬ。

斯界は一時的に好況

上述の如くに品不足である以上は勢ひ名古屋大阪神戸等に於けるストックの融通を計つて行くやうにせねばならないのであつて此意味からして此方面の市場は一時活況を呈することになるのは當然の成行で暫らくの間は其等の市價が上騰を見るべき運命を待つて居るのである。併し本年度の外國品に對する輸入は既に一千萬碼に達して居る上に震災以來追かけ注文も可なりの額に到達すべき模樣であり殊に關稅減免令に基いて羅紗類は從量五分乃至七分被服類は從價四割の減免が行はれたことであるから今後の輸入も益々增加すべく遂にはストックの不足も緩和せらるべきで市價の前途も下落を免かれぬことになるのであるが當面の問題としては上述の如くに多量の製品を燒失したることゝ今や冬物の需要期にあることゝ國內の生產が急の間に合はぬこと等の事情で其供給不足を訴ふることになるから我國內に於ける羅紗會社も一時的としても從來の沈滯から救はるゝことになるのは事實であると言はねばなるまい。

生絲損害影響

第八節　生絲界の影響と前途

橫濱港の全滅に依る生絲の損失は、倉庫在荷品六萬梱の燒失其他を合し約七千萬圓の巨額に達し、之が爲めに各方面に對し多大の影響を與へた、今其影響の主なるものに就て之を左に述べて觀る。

(一) 我生絲輸出市場を失つて一時取引中絕を見んとした

(二) 生產地一帶の製糸家を苦境に陷らしめた

(三) 米國輸出に一時支障を與へた

(四) 生絲輸出港爭奪戰を現出した

等は其影響の主なるものであつて、橫濱港の潰滅は所謂其生命とした生絲取引市場を失つた點に於て之れが物質的方面の損失は、前記六萬

梱生絲燒失の外其設備も烏有に歸したのであるから多大の損失と謂ねばならぬ、其他(二)生產地たる信州方面に對し數十年來の取引關係を經續した横濱の全滅が同地の蠶絲業者をして最も痛烈に打擊を與へたばかりでなく、群馬、福島、埼玉、山梨、茨城等の製絲家は信州絲を中心とする横濱を失ひ間接的に影響を受くる所のものが鮮くない、又福井、金澤等の蠶絲及羽二重輸出の方面に於て製絲家筋を一大苦境に陷らしめた外(三)海外の米國にまで輸出の一時杜絶に依り支障を與へたのである、而して之が爲めに受けた被害及影響は追而横濱港輸出關係業者の結束奮起を促し、更に轉じて、(四)横濱壞滅より生じたる生絲輸出港問題は端なくも神戸、名古屋、大阪等に輸出港爭奪戰が行はるゝことゝなり神戸地方に於ては關西筋及北陸筋の製絲家蠶絲家を根柢とし名古屋は信州系蠶絲製絲家及北陸筋に依り各々我國の貿易大宗たる生絲輸出港を求めんと躍起運動を試みらるゝことゝなつた、此形勢にして逆轉せば横濱の生命を奪はるゝの結果となるより、假令震災害を受くるとも數十年來の古き歷史ある同港を失ふは自腹を切るより苦痛とする横濱の有志及當業者等は米國筋は勿論政府筋及び舊地盤の得意先たる信州、金澤、福井等北陸筋に復活取引の援助的運動を經續するに至つたが、幸ひ横濱は震災後間もなく初取引として米國筋よりの注文に對し第一船の積荷を輸送し世間の同情も横濱に傾いて居るものゝ神戸も米國筋に輸送を開始した等、今に尙生絲輸出港の決定を見ない有樣であるが、此輸出港問題は二港主義を執ると稱せらるゝ噂さあり、或は一港主義に限るとせらるゝあり何れにしても我國全體の經濟上の立場から見て一港主義で行かなくてはならぬと言ふ譯もないと思はれるのである。兎に角生絲輸出問題は我國の存亡に係はる重大問題であるから、政府及識者と雖も輕視しては不可ぬ、須らく海外及國內の經濟狀勢に立脚して遠からぬ內に之を解決すべきである、次に參考の爲

めに我國の生絲對外輸出關係の如何なるものなるかを窺つて見る。

生絲界と貿易趨勢

我國の十一年度の輸出貿易總額は十六億三千餘萬圓で生絲は其約四分の一卽ち六億七千餘萬圓の巨額を占め、更に生絲製品を加算するときは優に八億圓に達し、全體輸出總額の約四割八分となつて居る、之を横濱市に入荷する總高に見ると

大正十一年度　五十一萬三千梱　同十一年度　五十三萬七千梱で十二年度產繭額も、前年に大差なしとして約五十萬梱の見當の入荷が横濱に振向けられるものとすれば、其一割强六萬梱の燒失であるから、九月一日現在の被害額は一梱千百五十圓として約九百萬圓の金額に達する譯である。

更に轉じて横濱に於ける十一年度及十二年度の生絲集散狀態を窺ふに

生絲入荷高

	十一年度	十二年度
一月	一八、四九五梱	一七、七三三梱
二月	一三、六九四	一六、八三〇
三月	三七、四一一	三四、〇一四
四月	三八、四六〇	四一、七一九
五月	三九、三九一	三三、四一六
六月	三三、五四三	二九、一八〇
合計	一八〇、九九四	

生絲出荷高

	十一年度	十二年度
一月	一五、九九八梱	二七、九一〇梱
二月	二三、八〇五	三七、〇八八
三月	三〇、〇三八	三一、〇六九
四月	四五、三三一	四六、七七二
五月	五六、三六九	二三、八一九
六月	三〇、二二一	三三、三七九
合計	二五六、六三六	二五二、〇四二

	十一年度	十二年度
七月	七六、〇三六梱	六八、〇九三梱
八月	六七、七八四	—
九月	四九、四七四	—
十月	五三、五〇五	—
十一月	六六、七二二	—
十二月	四三、三六五	—
總計	五三七、八七〇	—

	十一年度	十二年度
七月	六五、八三一	—
八月	五〇、二二〇	—
九月	五〇、二二〇	—
十月	五一、九五九	—
十一月	四八、九二九	—
十二月	四九、三二六	—
總計	五二二、九〇一	—

前記の表に依り觀るに十一年度と十二年度との比較は入荷高に於て約

一萬六千梱減少し、出荷高に於て十一年度は十二年度に比し約四千六百梱の減少であるから、震災前の八月末迄の豫想として既に三十一萬六七千梱の出荷數に達して居る譯で、十二年度五十萬梱と假定しても優に其六割强の出荷をなして居ると觀ることが出來る。

生絲貿易の影響如何

以上の大勢上から觀察して云ふと、震災の爲め一時横濱港の被害に依り先づ米國輸出上に取引中絶の爲め、輸出不能に陷つた無形の損失と生絲燒失の被害とを加算するときは、其有形無形の損失や多大であると謂はねばならぬ況んや震災後の九、十月は最も輸出成績の向上月で、震災前米國市場の復活と相俟つて手合高は四百萬斤と云ふレコードを作るの盛況を傳へられ、先約商談も行はれ、大に九月以降の活躍を期待せられて居た折柄に於て此被害を受けたのであるから其影響は却々大なるものであつた、然らば向後米國筋の需要は如何と謂ふに、現在ストックとしての米國在荷は二萬梱内外で新規震災後發送の分は別として、向後は需要期に入るの際とて急激に品不足を告げて米國筋よりの需要に基く生絲輸送は正に渴仰の狀態にあるし、輸出關係は極めて良好の立場を擁して居り併も依然海外市況は好勢持續の見越しなるは不幸中の幸ひとせねばならぬ、尙内地各方面も一時震災に依る變動影響の爲めに之が波動も尠なからず與へられたが、被害を受けた各工場も比較的少なく、生産能力に差したる影響はないのであるが、問題は生産費の資金如何の點である、一梱りの生産費は約二百五十圓見當で、全國一日の生産生絲は約二萬梱能力と推定されて居るから、生産費に於て一日五百萬圓の資金を要する譯であるが、生産費の大部分を占むる勞銀は多く年末決濟期の地方が多いのと、資金を必要とする原料買入に於て幸ひ延取引が行はれたから、製絲家は從來の如く問屋より五分の一の資金融通を得ずとも操業を繼續するに至つたことは斯業の現在及前途に對し悅ばね

ばならぬ、斯くの如く操業繼續の出來得る限り生絲生產能力は不充分ながら從前通りの生產力を發揮し得らるゝ現狀であつて、向後輸出方面の商談取引活潑に行はれ得る狀勢にあり而も米國筋等海外品薄の模樣より押して市價も値吹きを喚び且、海外取引の活況を呈することは明かであるから、生絲貿易の前途は內地製絲界の操業繼續と、海外輸出の出荷漸增と、橫濱、神戸兩港の活躍と米國筋海外よりの追注文とに依り、斯界は大に活況を告ぐるものと信ずる。

第二章　復興第一活氣横溢の建築材料界

第一節　木材界

木材燒失損害

大震災の爲に燒失した木材の損害は、東京深川木場の燒失が最大額のもので、震災前は、近來にない在荷豐富で、全部で約四五百萬石の數量があつた、此內で倉庫內にあつたもの約十五萬石が燒失を免かれた分と其他を合し合計四五十萬石位しか助かつて居らぬ、此以外は木材商、木場にあつたもの全部烏有に歸したので、之が燒失の損害は何千萬圓の巨額に上るであらう而して此燒失に依る損害は兎も角、全く東京には木材は、僅かに四五十萬石の殘材しかないことになつたのであるから、忽ち起る問題は東京三十萬戸燒失に對する、臨時施設のバラック建築用材の大不足と、向後帝都及橫濱等の復興計畫に要する建築主材たる木材の大需要問題との解決である、而して此急施に用するバラック建用材にしろ、殆どと之が供給を內地材と輸入材との輸送補足に俟つて之が臨時急施を樹てることゝなつたのであるから、木材界は從來の不況持續を急轉して、殷盛なる活況を地方筋及海外にまで波及したことは自然の需給調節を全ふする意味に外ならぬ形勢の成行とせねばならぬ。

以下『急施的木材需要の狀勢』、と『帝都及橫濱再建木材需要の狀勢』

とに分説し進んで木材界將來の影響を述べることゝする。

急施的木材需要狀勢

帝都及横濱の震災復舊は之を二段に分ち、當分の景況と大東京及横濱建設の景況とに區別して研究すべきで、彼の東京及横濱二百數十萬の罹災民に充當すべき、政府及東京府市、横濱市及公共的の施設に依る臨時的救濟住宅のバラック建築に要する木材のみにても、平均十坪のバラックを建てるにしても東京のみにて此處に千七百萬石の需要を必要とし之が用材としては板材、丸太材、角材等である。

而して其供給をなす産地供給關係から謂へば、紀州材、三河材、秋田材、北海材、米材、滿鮮材、西伯利材等其主なる供給先のもので此他内地各産地材は何れも多少に拘らず之が供給に與へられるものである。

尚現在在庫品供給關係から謂へば、

大阪七十萬石、名古屋三十五六萬石、其他産地筋の在荷品である。

又製材能力供給關係から觀察すると東京殘存は深川燒失の爲め此方面の供給不能として、子安製材に於て僅かに一日百五十石の製材能力と、大阪方面で製材會社三十五六社の分一日六千石月産十七八萬石、等其他地方筋の製材所であるが之が總産額一日を三四千石と看做し、其他の分を合し現在我製材能力を三萬石内外として觀ることが出來る。

右の製材供給能力關係から觀ると千七百萬石バラック用材を作るには向ふ壹年七ヶ月間の製材を必要とする、然し千七百萬石のバラック用材の内在荷品振向けの分が此内地方筋より二百萬石見當を充當し得らるゝとして差引千五百萬石の製材を必要とする譯になる、そうすると一日三萬石の製材能力として百日間卽ち壹年五ヶ月餘の製材供給を俟たねばならぬ計算となるのである。

次に横濱市の罹災者を收容するバラックは木材の供給が潤澤でなかつた爲稍其建築が後れたけれ共縣及市の經營するもので二萬八千人位を收容し得るものが出來收容されたるものは一坪二人見當であつて其他市内に個人で建築したものが假小屋ではあるが約五六千戸出來て居る、木材は大阪靜岡北海道方面から約二萬石位は來て居る、而して市内の商人を督勵して此等木材の供給を圓滑にする方針を執つて來て居るのであるが横濱市の復興用の木材のみでも少くも他に三四百萬石を要し、其急施バラック用途木材も全部供給せねばならぬから之等供給は、(一)官有林伐採增量と、(二)輸入增加と(三)民間製材との三方面に竢つ外はない、曩に發せられた政府の米國筋の八九百萬石の輸入材に、之に官有林伐採量を加へたにした所で、民間よりの供給量に於て、一千萬石内外の供給を仰ぐことゝなるのは明かである、更に復興建設は約三ヶ年後となつて居ると雖、建築材料は其以前に於て充分の配供準備を要する譯であつて觀れば、急施的施設の必要用途に充てる木材に引續き、其復興建設に充當すべき木材も追つて需要を喚起し來るから民間の供給力は急施的施設に充當す可き木材ですら各地品薄に次ぐに製材搬出を眼前の急務として居る折柄復興計畫用の木材も遠からず供給力の不足を告げ來らんとする有樣であるとして觀れば、木材の需要は此處數年間復舊の前後計畫を通じ、偉大の需要期に向つた譯であるそれであるから斯界の從來不振は茲に一掃せられて、向後數年間は何としても景氣は好勢に加ふるに繁忙を極めるに至るであらう而して此狀勢は内地産材のみでは到底製材が間に合はぬ關係もあり、景氣不振で萎靡沈滯を持續した滿鮮材、西伯利材に頓に景況を與へ、又北海材樺太材は大量需要の途に向けられるであらうと想像せられるのである然し内地産材は品質に於て優れりと雖、市價に於て米材に一籌を輸し居り、何れも總じて米材よりは二三割方市價高價である關係上、斯樣

な臨時的急施用の用材としては、米材に一足を讓ることゝなるが、然らばとて米材の市中在荷も、前出の石數中に含まれて居る如く在荷は其一部分に過ぎぬ有樣であるし、又本年上期中の輸入高は約百五十萬石で、前期の二百七八十萬石、前年同期の三百五十萬石に比して著しく輸入材は減少して居るから、此方面から觀るも供給は潤澤とは謂へぬ、尙下半期に入つて引續き既約品が入荷するであらうと思はれるけれども、震災以來產地の米國でも我關東震災に依る前途の景氣を見越し、相場は昂騰し、逆鞘となつて居るから、此處新規注文は杜絕し、假令此以上の輸入があつたとしても市價は幾分高値のものとなるであらう、而も向後の輸入材は現在として急施の間に合ぬものである、それであるから此立場上之を內地材の急給に俟たねばならぬのである、震災地バラック用として大阪府は既に約六萬石の木材を大阪同業組合より徵發して京濱に積送したが其後三井物產の寄附其他大手筋より納附のもの約二十萬石を急送し全國より約百萬石の米材が震災地方に供給され爲めに大阪在荷は殆ど一掃されたので一流の輸入商は此際如何にして之が供給を圓滑ならしめんかに苦心して居る。

右の外政府は東京橫濱の再建に付各地市場の在荷品に徵發令を發して木材の公賣を禁じ更に大林區署をして木材の廻送を行はしめ尙一方暴利取締令を發布して、民間の買占、思惑の助長を抑制し、尙物資供給令發布を行つて內地材の買上げ及び米材の輸入を圖る等の計畫を樹て既に木材約八九百萬石を他の鐵材等と共に注文し、之が物資輸入の上は民間の小賣業者に賣下げ一般の需用者に供給する方針を執つて居る此間暴利取締に就ては嚴重に取締る筈である。又政府は木材大量需要に付製材の急務を悟り製材所急設方策に付調査の步を進め、燒失工場中復舊し得るものには、低利資金を便宜融通するの外、政府自ら民間工場の不足を補ふ爲め相當大規模の製材所を經營する目論見で、農商

務當局は之が經費四百萬圓を計上し、復興院に管轄を移管して向後の復興を實行する方針を執つた等臨時的施設の準備は各方面に於て樹てられつゝある、隨而此急施方面に於ける木材の需要は右各大勢の上より觀察すると、(一)現在品薄、(二)輸入品未着、(三)製材力稀薄等で假令暴利取締令の實施があるにせよ、此大需要に對し木材一般の市價は自然昂騰の成行を呈し市價頗る强調を傳へられて居る有樣である。

復興的木材需要狀勢

政府の方針は既に公布の通り東京横濱等關東の大震災の再建計畫に對し、バラック式の假建築は之を許すも、向後三年間絶對に自由の建築を許さぬ方針であるが之は大東京再建の大計畫を有して居る爲めであつて民間の建築は先づ假建築に限られて當分自由建築を行ひ得るのである、此大東京の都市計畫は震災の爲に從來の方針に一大變化を與へ、新規の計畫に依つて行はれることに變更されたのであるから、震災復舊計畫なる名稱の下に向後復興建設が實行せられるであらう、そうなるとして建築の方式が如何になる乎、未だ政府は此邊の計畫を發表せないから、之に立入つて論ぜられないが假令耐震耐火的に全部設計せらるゝとしても、木材の需要は決して減ぜぬ、何故なれば此復興計畫は必ずや商工街と住宅街と工場街とに區分せらるゝことは、從來の大東京建設の方針と變りがあるまいから、此住宅街、工場街用として木材の需要は相當多量に上り、假りに一戸平均二十坪と見ても、東京燒失總面積百七十五萬坪の三分の二として百二十萬坪位ひ卽ち千七八百萬石を要し、之に東京平時の木材消費量年額三百萬石を合すれば、大約二千萬石の木材を必要とし其他横濱のも加算するから此以上の需要となる譯である。

第二節　洋灰界前途好況

洋灰燒失と需給力

今度の震災に依るセメントの被害如何と窺ふに淺野セメントの深川川崎の兩工場及鈴木セメントの深川工場は燒失の災に遇つた、今兩社工場の生産能力消失より之が國内セメントの全供給力に及ぼす影響如何を見るに先づ消失能力は淺野セメントの深川川崎兩工場の月産合計十七萬三千樽鈴木セメントの深川工場に於ける月産一萬五千樽兩社合して十八萬八千樽に達して居るが更に之を國内の生産力一千三百八十萬樽に比すれば正に一割五分に該當して居る勿論右の數字は何れも公稱のものであつて果して現在の各社操業の狀態が如實に前記の數量を生産しつゝありや否やは頗る疑問視せれて居るが現狀七八割程度の各社操業が最も眞實に近いものに信ぜられて居る爲め市中一般には現在の場合國内のセメント需要の狀態に鑑みても生産力の一割五分の消失はさまで斯界に打擊を與ふるものでないと察せられて居る、即ち本年上半期以來土木建築業態は昨年に比して不振の度著しく從つてセメントの需要も漸次減退せんとするの徵あり輸出に於ても辛うじて僅少の數量を維持しつゝあるに過ぎぬ（本年上期の輸出十七萬九千三百樽昨年中三十四萬四千三百樽）且又假令今次の東京震災によつて在庫品四十萬樽をも併せて燒失したりと云へ需要に應じては各社隨時に操業を擴張し得べきのみならず前途震災地の復舊工事に就き必ず需要喚起すべしとして、被害地に於ける自然的需要高を見込みて果して震災前の需要に比し幾千程度の增大に當るか甚だ疑しきことゝ觀測されて居る。

洋灰需要增加

次に我國に於ける洋灰需要增加の趨勢を研めて觀るに明治二十六年以來大正十年迄十年毎の增加額は左の如きものである。

年度	公稱資本	工場數	年産額
明治二十六年	一、〇〇〇、〇〇〇円	一〇	三〇〇、〇〇〇樽
明治三十六年	三、〇〇〇、〇〇〇	三	一、〇〇〇、〇〇〇
大正元年	三、三〇〇、〇〇〇	三	三、三〇〇、〇〇〇
大正十年	六、〇〇〇、〇〇〇	三	九、〇〇〇、〇〇〇

而して十二年度生産豫想高は前記の如く一千三百八十萬樽の多額生産であるから之が一割五分見當の燒失は供給力に差したる影響がないことは明瞭である、

我洋灰會社月産額

而して現在我洋灰會社として震災前に於けるポートランドセメント同業會加盟の二十社三十二工場の月産につき概算を示すと左の如きである。（單位千樽）

大阪窯業	三〇	土佐洋灰	三〇	日本八代	五〇	寶國荊田	六〇
寶國佐賀	二五	寶國名古屋	一五	電化	一二	中央洋灰	一五
帝國洋灰	一〇	櫻洋灰	二〇	磐城洋灰	二五	日本窒素三俣及鏡	三〇
淺野川崎	八〇	淺野北海道	三〇	淺野臺灣	一八	日出洋灰	一二
淺野門司	一二〇	大分津久見	四〇	愛知洋灰	一五	三河洋灰	一二
大分由頁	三五	小野田本工場	五〇	三重洋灰	一五	小野田大連	四〇
東亞洋灰	一八	小野田平壤	一八	木津川洋灰	二五	淺野深川	六〇
鈴木	一二						

關東復興と洋灰界

關東の大震災は地震の被害と云ふよりは、地震に依り發生せる火事の被害が大部分で、而も洋灰使用の建築物及道路、工場等總て震災兩方面共何等の被害を蒙つて居ない、即ち耐震、耐火力の偉大さを立派に證明し、其他のセメント建造物は、其耐久力等に於て、經濟上に就て木造に比し左の如き特長を有して居る。

家屋建築材料	保存年限	修繕費年額	保險料
セメント	一〇〇年以上	百分の二	千分の二五
木造家屋	二五年	百分の八	千分の六〇

右の表を以て觀るも、セメント建築の餘程有利にして而も耐震耐火力の偉大であるかを想像するに難からずである、されば、今回の如き大震災に鑑み今後の建築は政府の奬勵、民間の自覺等に依り當然、セメント建築の旺盛を極め、帝都再建に際し、之が應用を受くることは明かであるから、今や洋灰界の活躍時代に世の中が進化して來たことを何人も充分に經驗するに至つたのである。

洋灰會社 增産計畫

震災復興の前途に鑑み各社共復舊を急ぎつゝあるが淺野の深川工場並に鈴木セメントは震災の爲操業全く不可能となり、其復舊には早くも一箇年を要するから震災後の製産高とすれば右の二工場を除かねばならぬ、淺野の川崎工場亦震災の損害多く之が復舊容易でなく、假令復舊を急ぐとも年末に至らねば全部の操業開始は至難とされてゐる、然し同社は目下擴張中にある門司の完成を急ぎ、他方北海道、臺灣の兩工場亦同樣幾分の增産を行ふべく計畫してゐる、而して右の外目下廻轉窯增設中のものは大阪窯業、櫻、日出、大分の津久見等があり、更に中央、東亞の兩社亦增基を計畫中である、尙澁澤子の系統で昨年末創立された秩父セメントは操業の豫定期を早めて近く開始すると尙右各社の增産計畫が今春來行はれてゐる丈けに他方新に工場を設立する向も現はれてゐる、即ち大分セメントは大分縣大船渡に工場を新設するに決し、熊本縣の佐敷にも一社が新設される、之は設計其他の總てを大分セメントに一任してゐるといふ、更に德島には小野田セメントの分身で德島セメントまた山口宇部地方に一社新設された、その外從來整理其他によつて操業不可能となつてゐる舊稱助川セメントは日立セメントと改めて近く操業を復舊する模樣である。

洋灰界の前途大に好望也

聽て着手せらるゝ關東震災の復興事業に於て建設の首位に置かるゝ、建築、道路、鐵道等は殆どセメント需要を主眼とせらるゝ政府の意嚮であるらしいから、あの廣漠たる東京、横濱の數十哩の燒跡と之が新道路の計畫のみにても、之に要するセメントの需要は全く無限とも謂ふべきで、專門家は東京再建に使用せらる可きセメント量は少なくも三千萬樽を要すと稱して居る、之は東京のみの再建で横濱市其他を包含するときは四千萬樽に上る可く其他道路用、鐵道用を總計すれば優に五千萬樽のセメントの供給を必要とする、而して現在我國の生產力は年產一千三百八十萬樽であるから、約三ヶ年七ヶ月分の臨時的需要の供給を要し、平年產額一千三百八十萬樽は內地と、南洋支那方面輸出額と大約半ばの供給で需要消化されて居るのであるから、茲に於て平年生產以外、所謂關東建設分の五千萬樽を增產せねばならぬことゝなるのであるから、現在のセメント生產能力を餘程激增せなければ、之が供給も兎角不充分を缺ぐに至るであらうと觀察せられて居る位である、されば市價も昨今漸次昂騰氣配を呈し、平年一樽七圓値頃のもの二圓高値を呼びつゝあるが如き有樣であるし、セメントは當然品不足を告げ、且生產供給間に合はざる關係もあり、殊に我國のセメントは從來市價に於ても、外國品より餘程低廉にて輸入品は一樽十一圓なるに我製品は漸く一樽七圓位であつたのであるから此關係よりしても、輸入品市價比較値迄せり上げるに至るかも知れぬが、一方暴利取締令に觸るゝ點もあるから、勿論十圓見當の値頃として熾んに賣捌かれて行くであらう、而して內地供給不足の域にでも至れば、或は海外への輸出は杜絕することになるかも知れぬ、何れにするも洋灰界の前途は太に多望であると信ずる。

第三節　鐵材界の影響と前途

鐵材影響好況

鐵材は關東震災より受けたる影響に依り、急激に市況を刺戟せられ、建築材料用のものは、均しく一氣に從來の悲勢狀態より變じて好勢に向つた、而して之が波動は內地に止まらず、遠く英米の市場にまで影響し、東京及橫濱の復興計劃を見越したる思惑は相當熾烈の狀を呈した、更に政府の復興策に對する計劃の進行に伴れ、急施設用の鐵材に對する需要を喚起した、之れに付き民間に買占、思惑現はれんとしたが、彼の暴利取締令の公布と輸入免稅の實施とに依り、此弊害を一掃するの功を奏したが、大勢は需要の增加の爲め、亞鉛板を先頭に建築用諸鐵材は一齊に景氣附き市場の在荷は羽が飛ぶ勢ひで消化せられ、多く關東震災地に向けられ斯界は頓に般盛活況の域に至つた。

左に關東震災地向の鐵材の需給關係影響と之が前途とに就き述べて見る。

亞鉛需要激增

亞鉛板は震災地用の急施バラック建築に充當の爲め一時に急激の需要を喚起し、震災後間もなく市價相場は暴騰し、一枚一圓二十錢平年時價のもの、遂に二圓を突破するの高値を呼ばれ、關西筋其他市場在荷品は賣行活勢にて、忽ち市場品薄の聲を聞くに至つたが、暴利取締令公布の爲めに一時市價も幾分頭を叩かれたものゝ、當面の急需品たる關係上、又々市價は吹き返しの商狀を支持するに至つた、然れども政府は亞鉛板需要增加の先を見越し、之れが公定相場を左の如く東京の現在品に對し適用することゝなつた。

平板三十番	一圓八十錢	生子三十番七尺物	一圓九十五錢
同　二十八番	二　圓	同　八尺物	二圓二十錢
同　二十六番	二圓三十錢	生子二十八番	二圓二十錢

生子三十番六尺物　一圓七十錢　　生子三十番　丸揚　一圓九十五錢

然し前記の公定相場は東京在庫品のみに就ての適用であつて全國的に權威のあるものでない譯であるから、關西其他の在荷品は市價は飽迄強調を改めない狀態を呈した、今亞鉛板三十番六尺もの一枚に付ての過去數年間の平均時價の上より觀て如何に市價が暴騰の狀を辿つて居るかを窺ふに、（單位錢）

九年	二、〇一、	十年	一、五一、	九八、
十二年	一、〇一、	平場	一、三八、	震災月 一、五〇、

右平均相場として觀ても三割の高値であつたのが、現今では震災前に比し約五割方の高値を示して居ると云ふ有樣で建築材料品中一番の暴騰である。

而して亞鉛板は震災前迄生產過剩の爲め市況不振、製造工場中閉鎖するものもあつた位であつたのに、震災後需要の激增した爲めに、關西筋各工場は遽かに增產を行ふやうになり、又東京方面の被害を蒙らなかつた工場も弗々生產恢復を行ひ、全能力を發揮して供給に從事して來たが、それでも需要に對する供給は不足なので關西方面の各工場は既設に未設を加へて各工場共晝夜兼行で製造を急いで居る、大阪を中心とする附近の鍍金工場は日產十六萬枚の生產能力と稱せられて居るが現在の製造高は平均一日十一萬枚となつて居る、此以上の一日五萬枚を製造する餘力ある工場に就て其鍍金槽及日產能力を擧げると

（枚數千枚單位）

	日產枚數	鍍金槽	現在操業中鍍金槽
大阪鐵板	三〇	四	四
日本亞鉛鍍	二〇	四	三
乾鐵總	五	一	一
關西亞鉛鍍	二〇	四	四
共同建材	一〇	二	二
ドック平滑板	二〇	四	二
大正亞鉛鍍	一〇	二	一
大阪亞鉛鍍	五	一	休
東洋亞鉛鍍	五	一	同
寶亞鉛鍍	五	一	同
蘆田工業所	五	一	同
井澤工業所	五	一	同
神戸亞鉛鍍	五	一	一
高尾鐵工所	五	一	一

浪速亞鉛鍍	五	一
日出亞鉛鍍	五	一
合計	一六〇	三〇

二一

である、生産品は向後當分關東震災地一帶に消化せられて行く譯であるから亞鉛板は鐵材中一番好勢に向つたのである。

亞鉛板益好望

亞鉛引板は震災前の市況生産過剰に腦まされ、市價も平年より幾分安價を傳へられ、品捌きも遲々たるものであつたが震災勃發と同時に罹災民用として關東震災地一帶に假住宅建築に必須品たる關係上、政府筋の買上げと當業者の買込みとにて既に市中品物稀薄となり向後の需要は之を生産に俟つ狀態であつて、米國筋に對する政府の大口注文も打切られることになつた等市價は暴利取締令の支配を受けると雖、何分市中在荷拂底を告げ、其上需要の急激に追はれ居る時であるから、之を向後の市價及商況の方面から云つても、生産筋と云ひ、販賣方面と云ひ益々好況持續の譯であつて此處暫らく斯業の前途は木材と共に震災に依り好影響を受くる筆頭のものであると云ふことが出來る。

一般鐵製品影響

一般鐵製品中建築用のものは何れも震災の影響にて市價は强調を辿つたが就中釘、針金は震災前まで市中在荷も相當にあつたものが、關東筋に需要消化せらるゝことゝなつた爲め、市價も一氣に上向き平素相場の十三圓五十錢から月餘ならずして二三圓方の暴騰を呈するに至つた、針金も同樣である、電線は藤倉の洲崎工場、古河の横濱工場共被害少なかつたから、懸念されたケーブル類の製造回復も容易で、供給に支障がない、其他の各線は住友電線尼崎、日本電線古河九州工場、東海電線、半田電線等は何等支障がないから電線需要には餘裕綽々たる有樣であるが、需要喚起の爲めに、市價は多少强調味を持續するものと思はれる。

鐵材需給と前途

關東の復興に要する鐵材の需要は決して木材の夫れに讓らぬが、政府は初め復興計畫用の鐵材の供給難の來たらんを虞れ、英米國筋に對し大量輸入の計畫を樹て、鋼材輸入に關する免稅を實施することゝなつたが、其後國內の大勢に鑑み之が輸入計畫の中止をなすに至つたと云ふものゝ、內地製品のみには到底平年すら需要力薄き譯であるのであるから、三井物產其他の大商人の手に依り輸入は繼續せられると觀る可きで復興の進行と同時に輸入品は大量震災地に向けられることゝなるであらう、翻て我國で鐵材の供給を賴る所は八幡製鐵所であるが、同所は震災前に於て各種ストック數十萬噸を擁して居たので、早速之れが需要方面に向けられたが忽ち供給難に陷り、既に爾後一ヶ年分の注文があつたと云ふ有樣で、各建築用の鐵材共生產が間に合はない趣となつたので已むなく、按分賣出しを開始したと云ふが如き狀態で、向後生產能力の增加を計り、出來得る限り內地製品の供給を行ふ豫定ではあるらしいが、何れにするも大量の需要に對する供給は不充分の傾があるから輸入品の緩和に俟つて之れが需給の調節を行ふやうになる可く、要之復興用の鐵材は復興建設の實行期、少くも向後五六年間は好勢持續の活況を呈することを信じて疑はぬ。

第四節　スレート業の好影響

震災とスレート業勃興

震災に當りスレート葺の被害がなかつたことは一般の認むる所で、之れが爲め、スレートは向後急激の需要增加を見る可く、スレートは假建築にも本建築にも使用せられ得るの關係から、關東復興には必ず相當の使用量に上る見込であるが、一體スレートは內地製品は價格に於て輸入品より二割方も安いのであるから、輸入不引合にて內地製品の需要が激增のことゝなるで

あらうが、現在としては月産三百萬枚の淺野スレート東京工場が被害を蒙り、約六ヶ月の復舊時日を要する譯であるから、現在としては同社門司工場及日本石綿盤の神戸工場にて二百萬枚の生産あるに過ぎぬ狀態である爲め、需要の增加に對しては、之れが供給難の問題も生せないかと想像されて居る。

斯業前途好望

以上の如き形勢であるとすればスレート事業は震災後の復興計畫に於て、主要なる建築材料品として珍重せらるゝこと無論にて、從來は餘り普及せられなかつたけれども其效用の顯著は震災と共に此處に現はれたのだから、將來の需要は餘程多かる可く、殊に本邦製品は輸入品に比べ市價も一二割方安い位であるから、斯業は今後に於て漸次發達し大に好望なる事業の一つとなつた。

第五節　硝子工業の前途

硝子工業被害前途

這次の震災で建物の全部が烏有に歸した爲め、硝子は全部破壞し、其被害も相當の額に上り、在荷品の燒失と共に何百萬圓と稱せられて居る、之れが結果市中在荷品は稀薄となり、一方に需要は激增の趨勢に嚮ひ向後復興事業に要せらるゝ數量のみにても、關西筋市中在荷品にては到底其需要の一部分にすら過ぎずして關東方面の急激需要に充當すべき見込更になく、隨而之を硝子會社の供給と輸入とに俟つ外なき狀態なるが、我國の硝子會社としては旭硝子會社、日米硝子、極東硝子の三大會社ありて、旭硝子は一般ガラスを產し、日米は厚ガラス、極東は縞板、堅板を生產し從來內地向に需要せられ來たのであるが、我硝子工業は近年の發達に屬し、未だ自給自足の域に達せず、されば海外品たる白耳義より年々

多量の輸入を仰ぎ、需給の調節をせられ來つたのであるが、內地の會社としては旭硝子會社九州戸畑工場月產五一、〇〇〇箱、鶴見工場三〇、〇〇〇箱と稱せられて居たが、震災の爲め、同社鶴見工場破損したので其復舊は本年一杯を要する模樣なるも、同、九州戸畑工場は無事完全作業中にて同社は今回の事變に依る硝子の激需に鑑み、增產計畫を進め、鶴見工場の急施恢復修繕を行ひ、六五、〇〇〇の增產をなし、戸畑工場又三七、〇〇〇の增產を進める筈であるが、要するに市中在荷減少と需要の激增趨勢なるとは、向後自然市價の强調を含みて、相當の上値に向ふ可く想像せられ居り、隨而斯業の前途は多望と云ふの外なく一般より多大の冀待を持つて迎へられて居る。

第三章　電力電燈界影響前途

發電所被害高

電力電燈界の受けたる被害も極めて大である、今左に遞信省調査に依る發電所の被害狀況を會社別に擧げると

東京電燈　桂川水系に於て、八ヶ澤發電所水槽に龜裂を生じ水壓管の基礎崩壞の爲め復舊に相當の期間を要する見込、尙大野調整池は堰堤龜裂で使用不可能とせられ、駒橋發電所は水路に多少の損害あるも發電に差支ない、谷村發電所の建物破壞せるも發電に異狀がない、鹿止發電所は被害大にて當分見込立たない、若松發電所建物破壞せしも應急修理の上三浦半島全部に送電を續始して居る、以上は同社の水力發電の被害狀態であるが、次に同社の火力發電の被害に就て云へば神奈川汽力發電所は被害少なく復舊容易、隅田川火力發電所も同樣被害輕微で發電に支障がないとのことである。

帝國電燈は房總方面に於て佐貫營業所發電機一臺運轉不能なるも輕微被害である、保田發電所は異狀なく、千倉發電所は發電機破壞建物傾斜の被害である。

木更津電燈會社の木更津發電所に故障ありしも直ちに復舊した。

安房電燈會社の第一發電所は被害少なく、第二發電所は建物倒壞し復舊の見込立たず等である。

更に電燈被害の主なるものから云へば、東京、横濱兩市に於ける東京電燈の供給設備費に於て一億四五千萬圓の被害で、其他の會社を加へた、兩市の電燈々火數は約四百萬燈で、此内震災被害を受け又は燒失したものは、約二百五十萬燈に上る趣であるから、之が復舊費は約七千萬圓を要すべく尙此他變壓器及モーター燒失損害等を加ふるときは優に八千萬圓内外の被害高に上るであらうと稱せられ居る、それであるから、水力、火力、電燈設備の三方面の損失に依る、電氣界の影響は却々大なるものである。

電力の需給影響

次に關東筋に地盤を有して居た電力電燈會社の電力供給上より觀たる當然の影響は電力の過剩を來たした點であるが、之が需給關係を調節する爲めに、關西方面に振向けることの如何なるやと云ふ問題であるが、之を輸送するとするには左の支難事がある。

第一、サイクルの相違があるから關東の五十サイクルより六十サイクルに轉換するには多少の機械的設備を要する

第二、線路を新設せねばならぬが之れが爲めに多額の資金と約二箇年の日子を要す

第三、二百哩を輸送すれば輸送上の電力の喪失多く結局電力がエコノミカルパワーとしての價値が極めて薄くなる

との理由で電力の西送は實現困難とせられて居るが、しかし東京横濱

を電力の消費地としてゐた信越方面の發電所は得意先の潰滅によつてこれが復興を待つてゐる譯に行かぬから多少の犧牲を忍んでも大同電力と協定して名古屋方面に低率な電力輸送を開始し、大同電力の餘力は擧げて之れを阪神方面に轉送するかも知れぬ其他本年末迄に阪神方面に送電される電力は今の所

大同電力　讀書發電所四萬キロ　桃山發電二萬キロ合計六萬キロ

日本電力　瀬戸發電二萬三千キロ　宇治電第二期工事　二萬キロ

總計十萬三千キロに達する筈であるが、大同電力では讀書の完成と共に目下大阪市との間に問題を惹起してゐる春日出第一火力發電所を水力に換へて火力を豫備とする意嚮あり、且つ大阪市電氣局に供給してゐる動力、電燈、電鐵用の電力需要が約二萬キロに增加すべき筈であり、宇治電では尼崎市神戸市電に之れ亦毎年二萬キロの需要增加すべき形勢であるから今の所では電力不足で弱つてゐる有樣であるから、

此見地から觀て關西方面は關東の剩餘電力輸送を幾分受けることになるかも知れぬ、何れにしても未完成の水力電氣事業は相當打擊を蒙り、今後全國の水力電氣會社にして資金吸收難の爲めに社債募集の不成績等より工事を中止するの已むなきに至る者續出するやも知れぬと想像されて居る。

電氣界の前途

東京、横濱の復興建設は向ふ三年後となつて居るから

（一）送電需要關係　に於て電燈方面の需要を激減する動力供給に於て工業地帶は多く郡部にあつたから影響も少ないとしても從來の供給額に半減するであらう

（二）設備破壞關係　に於て新規に造營又は修繕費多額を要し、此二方面よりする消極損は、東京電燈會社を始め、震災地に地盤を有して居た會社の一大痛手と謂はねばならぬ

隨而關東方面の電氣界は影響を蒙る所大であるが、關西方面に地盤及

設を有するものは何等の痛痒を感せない譯である、要するに電氣界は關東復興の期に入らねば差當り好影響を受くるに至らないものと想察せられるのである。

第四章　供給難裡にある電機界

電機界の被害

震災の爲に受けた電機界の被害も隨分甚大であつた、今其被害の主なるものを左に擧げんに

電話機

震災後の帝都は非常な電話饑饉で約九萬の架設數を算した東京市内電話で現在開通してゐるのは甚だ小數で、それで其割當も仲々難かしく災害事務に全力を擧げて居る内務省と府廳市役所が四本づゝ陸海軍警視廳大藏省は辛うじて三本、戒嚴司令部が二本、司法省や外務、文部、農商務の各省は一本に限られ、各警察署には一本も架からないと云ふ有樣で、飛行機や自動車以上の貴いものと見做されて居る。

現在内地の電話機製造工場で遞信省の指定工場となつてゐるものは日本電氣、沖電氣、古河電工、川北電機の四社のみで、その内日本、沖、古河の三工場が災害を蒙り比較的小規模の川北電機のみ殘つたのであるから、前途の大需要に應ずる力はない、又現にこれ等四工場が入札によつて遞信省へ納入することになつてゐる約定品は三十萬以上四十萬近くあるが大部分が製作不能の狀態であるから、電話機は當分外國品を輸入せねばなるまい。

變壓器

電燈、變壓器、モートル等の電氣機械器具は今次震災で滅却したものが非常に多いから災害復舊用の需要に對して甚しき供給不足を免がれない而して變壓機、モーター、配電盤、碍子、電線等は何れも大阪から供給される事になるから久しく不景氣を喞ちつゝあつた京阪地方の電氣機具製造界は活氣を呈する事となつた。

電球

電機器中就中復舊に急を要する電球は製造工場の燒失により內地品のみでは迚も需要に應じ切れぬ狀態にある、內地現在の電氣の需要は年額三千五百萬個內外であり、これに對する供給は東京電球會社と同社の傍系會社たる關西、サン及び日本電球との四社で需要總額の約八割を供給し、他の群小會社三十數社で殘餘の二割を供給するのであるが、その中の最大需產者たる東京電氣の工場が今回燒失したゝめに遽かに供給不足に陷つたのであり、又同社系の關西三社を除いた各社の生產は月額總計二十萬個內外に過ぎずしかも目下關西地方にある各社製品の在荷は百萬個に滿たぬからその內關西の需要品を差引くと災害復舊に充當し得るものは極めて少なく、この外獨逸シーメンス會社の內地支店で賣出してゐる獨逸製オスラム、オータムの兩電球も目下の內地在荷は四萬個餘に過ぎぬから、此際外國品を輸入するより外に復舊の途はあるまいとせられて居る。

電動機

電動機は震災の爲東京の在庫品全滅し、又東京方面の製造工場中日立製作所の龜井戸工場倒壞し明電社の大崎工場は震災前火災に罹り其他も震災で燒失した等何れも早急に操業を開始する事が出來ぬ狀態にある、一方電動機の供給の杜絕してゐるに反し災害地の一般製造工場は秩序の回復するに從ひ操業を開始し電動機の取替多いので電動機の需要は逐日增加しつゝある、從つて東京方面に於て供給難に陷つた同品の取扱業者等は關西方面の在庫品を買漁つたが、關西方面においても震災後製材所を始め、綿織物或は毛布の如き災害地に需要多きものを製造してゐる所では增產計畫を立て電動機を增設する向多いので、十馬力乃至二十馬力の小型より七十馬力乃至百馬力の大型に至るまで各種電動機の需要增加し、東京方面の需要と相俟つて遽かに供給難を喚ばるゝことゝなつた。

電機界の前途

今回の事變に依り關東地方の同工業が全滅した結果我國の全需要は殆んど關西製品と中京製品とに依り之が供給を仰ぐの外はないが之れが爲め關西中京製品は關東の新需要と足元の需要とに對し供給をせねばならぬことゝなり、大に生産上の努力を必要として來たが、現在としては國内供給力甚だ減縮し需要に應じ難き狀勢である、隨而久しく我電機製品が支那市場に優秀の地歩を占め追年輸出增加の趨勢にあつたけれども、此事變の爲め供給力を激減したから、輸出方面も衰微の外なからざるべく、斯く考へ來ると内地品の供給難は圖らずも獨米製品の輸入に仰ぐの結果を觀ることになるやも知れぬ、それであるから、現在として我國は電機界の恢復と發展に全力を傾注せねばならぬ立場にあるのである。

第五章　前途樂觀の精糖界

精糖各社被害と復舊狀態

精糖界の蒙つた被害に就て之れを左に分説して觀る。

明治製糖損害補塡　同社川崎工場は日産能力二百噸卽ち三千三百六十俵の精製糖を有し、建物、倉庫倒壞に依る損失は相當額に達す樣傳へられたが、實際調査の結果、此損害額卅萬圓程度で、尙此他京橋區越前堀倉庫に在つた製品の凡三萬俵（分密及半製品）一俵當り評價十八圓内外と觀て合計五十三四萬圓見當の燒失損と、姉妹會社の小網町明治商店建物什器等燒失損二三萬圓を加へ同社震災損失總額は八十六萬圓内外の模樣である、右の如く損害は割合輕微で此損害は全部今期利益金中の一部を以て補塡して終つた、而して今期配當を前期同樣一割八分を行つた等餘裕綽々たるものがある、更に川崎工場の倒壞に依る運轉中止の生産減は同社製産割當額八十六萬俵中、

五十萬俵に達し、隨而此生産力を減退するに至る譯であるが、同社は直に帝國製糖の神戸工場を買收し、更に北海道工場の增産計畫、川崎工場の復舊を急ぎ居れる等來期の成績には些の影響なき樣追々生産增加の設備方法が樹てられて居る。

大日本糖
被害高　大日本製糖の損害はと云へば（一）市中倉庫分密糖在荷三萬俵、精糖五千俵燒失、此損害額六十萬圓見當（二）本社建物什器十萬圓內外燒失（三）小名木川工場全壞其損害額六十萬圓位で合計百三十萬圓內外の損失である、然し此損害は前期繰越金で優に補塡することであらう、今期の成績は前期より良好であるし、同社は此損害を受けるとも何等の苦痛を見ないのである。

鹽水港糖
損害程度　同社今回の震災被害を觀るに、分密糖燒失九萬三千九百俵、A双一部納稅四萬三千七百五十俵此見積損害額二百三十餘萬圓とせられて居るが、上半期に於て二百十萬圓の利益を計上し、本年上下

両期に三百二十餘萬圓の利益となり、臺灣產糖六十三萬俵の內十四萬俵が燒失し、五萬俵が手持となり、殘餘四十四萬俵を販賣したのである、同社は近年經營稍當を得ず一方に借金もあるし、震災打擊は幾分向後の社勢に影響せないかと想像されて居る。

臺灣製糖
被害程度　同社は精製糖四千俵、分密保稅品一萬五千俵、合計一萬九千俵、其損失價格約三十萬圓で其被害が少なかつたのは製品の大部分は大阪方面に集中して居た爲であると云ふが、被害程度も輕微であり左したる困難事を見出すに至らないであらう。

東洋製糖
被害程度　同社は（一）製品燒失に於て分密糖七萬俵、耕地白糖二萬俵裙物一萬俵合計十萬俵で、金額百五十萬圓見當の損失額であるが、同社は十二月末締切決算であるから、前期より豫定の利益しかない譯で此損害額を控除すると豫定利益は飛んで終ふ譯になるから、當然無配當となるべきであるが、來期の利益を繰入れ、今期は配當を繼續する

であらうと觀ぜられて居る。

帝國精糖被害程度　同社は本店事務所の燒失損害拾萬圓見當と製品分密糖三千五十俵、二番糖千四百俵、酒精百三十箱此價格六萬圓見當であるから總計十六七億圓の損失高である、被害の割合少なかつたのは震災地帶に工場を有して居なかつたからである、而して下期利益百二十三萬圓を計上し差引百五六萬圓の利益計上となり、各種の積立を行ふとしても八分の配當は繼續可能であるから、社務に影響する所は少ないのである。

新高製糖被害程度　同社震災損害は帝國及東神倉庫にあつた分密糖一萬五千俵此價格二十一萬圓程度の損害である、此他營業什器三千五百圓として二十二萬圓の損害で同社は九月末締切の決算に於て此損害金を控除して純益金百一萬圓、卽ち前期の約二倍を計上し、一割二分の配當を行つたから社務の上に何等の痛痒を感ぜない譯である。

製糖界の前途

之を要するに精糖界は本年に入りて各社共總じて產糖の成績良好にて加ふるに市價幾分好勢を辿つて來た場合でもあり、尙燒失糖が各社を通ずると相當の額にも上り其他市中の砂糖商は大半手持品を燒失し、市中在荷も稀薄であるし一般の需要も一時に喚起するであらうし、外糖の刺戟變化あらざる限り需要は却而增加の形勢にあれば、各精糖會社共向後の成績は寧ろ向進するものとなる可く、隨而精糖界の前途は樂觀に値ひすと稱して可なりである。

第六章　好勢轉化の海運界

海運界好轉す

震災前の海運界は依然不振にて近海、沿岸、遠洋航路共一樣悲勢的景況を繰返すに過ぎなかつたのであるが震災勃發と共に頓に活氣を添へ卽ち斯界は一般財界の景氣

如何に拘はらず荷動き急增し暫時多忙を呈することゝなつた震災以來各方面を通じて出入ともに荷動きの增加極めて著しいものが多い中でも目立つのは出貨では阪神以西から震災地を初め東北地方、北海道方面に行く雜貨、織物、道具類、藥種、上海、青島へ出る綿絲布、雜貨類若松から香港、新嘉坡へ行く石炭である又入貨では北海方面の木材が例年より永續し朝鮮米積取漸く多忙となつた孟買からの印度棉も亦太絲工場の被害少く而も是等が全能力を働かせて居るところから例年より減ずべくも思はれず紐育からの鐵材、機械類、ピューゼットサウンド方面の木材積取は既に異常の繁忙を見せ瓜哇の砂糖、濠洲の小麥積出も亦增加して來た。

海運界前途好勢

海運界は遠洋、近海、沿岸航路共、大震災の爲めに各地內外港より、東京、横濱に向け就船するもの漸次增加し且、震災と共に臨時急施の配給を目的とする物資の輸送方面に使用せられし爲め、從來より不振航路に就船せし船舶は多く京濱方面に輸送の任に當りしかば、陸上輸送の不足を補ふこと多大にて、海運界は震災以來俄かに活勢に向ひ內外の傭船も好況を呈し運賃も平時よりは割高の料率を以て、各船とも相當の成績を擧げた、尙物資の大量輸送を要するもの西は名古屋關西筋大阪、神戸等より九州地帶に至るまで、又北は北海道方面、外は、米國よりの輸入品登載運輸等、木材、一般建築材料品、食糧品、衣服類、等必須なる物資の輸送方面に廻はされつゝある有樣にて向後尙東京及横濱の復興事業の完成に要する總ての物資は勿論陸運の不充分を補ふものは海運に全部積載輸送せらるべきものであるから、內地近海航路は一層の般盛を傳へらるゝことゝなるべく、之れと同樣遠洋航路の北米航路も、輸入物資の輸送に從來の不況を一蹴して活躍期に向ふであらうから、海運界の前途は此處數年間面目一新の好勢を告ぐるものと觀察されて居る。

第七章　關東衰弱關西活況の造船界

關東造船大滅

震災の厄難を受けた關東の造船所の內最も被害の大なのは、石川島造船で自働車工場、汽罐工場の全部燒失、損害一千萬圓、横濱船渠も僅に造船臺一部を剩せしのみにて、他は倒壞燒失し、浦賀船渠も建物及營造物八十五萬圓、半製品材料品二百萬圓、船代器械器具、横濱分工場で合計四百二十萬圓程度又淺野造船は潰滅、浦賀船渠も潰滅等で此等の被害の爲めに各社とも從來工場能力の五分乃至二割を殘すのみとなつたが、之れを各造船所の一ヶ年の修繕能力から云ふと、横濱船渠百五十五萬噸、浦賀船渠四十萬噸、船渠を兼營する淺野造船、石川島造船を合し二百五十萬噸以上に達するのであるが、之れが一時に能力を喪失した譯であるから、全く關東造船船渠界は全滅ならずとも大滅と云ひ得るのである。

被害造船復舊

被害造船所今後の復活は金融及物資の供給如何に俟つのであるが今各社の現況を聞くに浦賀ドックは營業開始まで大部分は職工從業員に月給の一部を給し石川島は一部職員を解雇しその他横濱船渠、淺野造船は何れも跡片付を急ぎ在來の事業は縮小繼續する筈である、併し横濱港があんな有樣で內外寄港船舶は關西方面に吸收されるだらうから關東造船業者は一層經營困難に陷るのは已むを得まい、又社業復活について政府で補助を與へることも出來ないから造船業者はこの際華客を失はぬため苦しみながら註文引受けに餘程勉强せねばなるまいとせられて居るが、海軍省には此等從來の關係會社に對し之が復舊に對し相當の援助を與へるらしく、隨而遠からず復舊も次第に行はれるに至るであらう。

關西造船能力如何

關東筋造船所の大減に依り之が復舊を見る迄には相當の時日を要す可く、之が爲に與へたる我國の造船力は現在として關西筋の造船所の力に俟つの外なき狀勢となつたが、然らば關西筋各社の造船能力如何と云ふに

今之等造船所の修繕能力に就て觀ると（一年間）藤永田二十萬噸、鐵工所備後工場二十萬噸、同築港工場三十萬噸、同櫻島工場八十萬噸、同因の島工場八十萬噸、三菱神戸造船所百萬噸、同長崎五十萬噸、同彦島工場二十萬噸、川崎造船所二十五萬噸、神戸製鋼所鳥羽工場五萬噸、播磨工場三十萬噸、三井造船所玉工場八十萬噸、及函館船渠三十萬噸、計五百五十餘萬噸であるが之を本邦汽船總噸數と對比すると手一杯の姿である。

關西造船活氣往來

關東筋造船所は大被害を蒙り混沌迷遑の姿なるに比し關西筋の三菱浮船渠（神戸）大阪鐵工所、播磨船渠、笠戸船渠、川崎造船所及三菱造船所（長崎）等の各造船所は俄かに活況を呈するに致つた、之れは、關東の横濱、浦賀兩船渠、石川島、淺野兩造船所の大被害の爲に船舶修繕力を全滅したに原因し從來横濱船渠は郵船、淺野造船所は東洋汽船、浦賀船渠は山下汽船と特殊の關係があつてそれ〴〵船渠修繕をなして來たのであるが、震災にて此等造船所の特別關係の船渠を失つた汽船會社が何れも關西方面の船渠に修繕を依賴せねばならなくなつた、而して冬期は一般に定期檢査又は特別檢査を受ける時期に達してゐるのみならず、郵船及び東洋等の定期命令航路の船舶は期日を限定するので期日までには無理にも修繕を定成せねばならぬ關係にあるので之等船渠は一層仕事に追はれる事となるらしい、之等に調子づいた造船所では震災復興用に充て

るべき電車、貨車、橋梁、鐵塔（高壓電線）等の雜仕事をも引受けてゐるのみならず、これまで造船所附屬工場として使用してゐた製材工場も復興用材料の製材に使用する事となつたので漸く息を吹き返した譯である。

造船界の前途

叙上の造船界の現勢より其前途を考察すると、關東筋造船所の被害會社は減資の下に經費を節限し、極力復舊に從事するであらうし、夫れに海軍側の援助もあり、假令能力減を觀るとも、註文の引受も向後漸次行ふに至るものと思はれるが、從前通りの能力は勿論冀待出來ないし、完全に復舊するには尙年餘の歲月を要する、さすれば我國造船力の四分の一を失へる現在としては必然關西筋造船所の般盛を來たし、關東衰弱、關西活況の場面を斯界に現はし、之を造船界の全般より觀るときは從來に比し幾分好勢の域に進むであらうと想像せられる。

第八章　需要增加構への製紙界

製紙界の被害

今回の震災に依り製紙界が如何なる被害を受けたかに付左に之を從前よりの需給關係方面から觀察して觀ることとゝする。

(一)京濱間の在荷全滅に瀕したること

(二)富士製紙、王子製紙等諸工場の罹災及破壞

とに分けて觀察すると左の如くである。

其損害を見るに在庫品の消失は東京四千二百九十萬六千封度、横濱七十五萬六千五百封度合計四千三百七十六萬二千五百封度を算せられ、更に震災に依る生產の破壞は一箇月千七百六十萬封度に達すと見られてゐるが破壞工場の一箇月生產能力は左の如くである（單位萬封度）

工場	産額	工場	産額	工場	産額
王子十條	二五〇	富士三工場及芝川	六五〇	王子王子	一三〇
三菱中川	二〇〇	富士江戸川	二〇〇	その他	三五〇

而して之に對する東京の消費額は一個月二千三百萬封度で、内一般用紙千五百五十萬封度、新聞用紙七百五十萬封度の割である、尤も此中より他に移出する分を約四分の一と見て東京だけの實際消費は千七百廿五萬封度であるから今回の在荷消失高と一箇月の生産不能高との合計は一箇月消費高と大差ないが、消費の漸增は着々望み得るも生産の回復は一朝一夕のことでないから、一時的としても一般用紙の昂騰は免れ難いことであらう、但し新聞用紙の生産地は全部北海道であるから東京諸新聞紙の一時發行支障より總産額の三割に達する需要の大激減を來した結果當然低落を免れないであらう。

尙東京横濱において洋紙約六萬噸とパルプ約三萬五千噸を收容してゐた倉庫の内、パルプ一萬噸を收容してゐた千住の一倉庫を除き全部燒失したが、その損失高は洋紙二千四百萬圓、パルプ四百萬圓合計二千八百萬圓見當であると稱せられて居る。

次に我國の二大製紙王たる富士、王子兩製紙會社の被害及其前途に就て向後の斯界の影響を窺はんに

富士製紙被害及前途

同社が震災により被れる損害の直接損害は(一)本社建物の燒失、(二)江戸川工場の被害(輕微)、(三)千住工場の被害(輕微)である、江戸川工場は本春竣工の新工場で上等印刷用紙專門工場で抄造機械三臺の内二臺は既に運轉を開始し、千住工場は煙突や、煉瓦塀が破損したのみで被害少なく、機械の運轉にも支障がない兩工場の損害見積は二三萬圓見當、本社損害十五萬圓と見て合計十七八萬圓内外であらう、而して同社の間接損害とも云ふ可きものは、彼の同社等の販賣機關たる共同洋紙、共同パルプ會社の損害である、共同洋紙に於て新聞卷取用紙約六萬本を燒失し、共同パル

プでも一萬噸内外のパルプを燒棄した、兩社の總損失は五百萬圓以上に達する見込で此損害は關係各會社の分擔であるから同社の分は百七十萬圓内外見當、此他貸倒損が此方が八十萬圓あるとして、二百五十萬圓の損害となるであらう、假りに斯く觀察すると同社の此直接、間接の損害を合計すれば二百七十萬圓になる譯であるが、此損害を積立金の内で塡補するか或は共同會社の損害とするか不明であるが、何れにしても震災突發の爲に工場の生産減損を來たし、又賣上減額のことゝならうから、當期は勿論一割程度の減配を行ふことゝなるであらうと觀測されて居るが、大體より云へば、直接間接の損害ありと云へ相當實力を有して居るから、此損害ありと云へ、社勢に於て影響する所はない、生産能力の經續伸張と相俟つて、向後の製紙界に一層の活躍をするに至るであらう。

王子製紙被害及前途

同社の震災被害は王子及十條工場の破損に依るもので王子工場の内被害の輕い第一工場第三工場は九月二十二日より既に運轉を開始し、第二工場は修繕中である、此等の復舊工事費は二十五萬圓内外で、製品の燒失損として共同洋紙、共同パルプ兩社及市中倉庫保管中貸倒れ分を總計すれば三百萬圓に上るであらうと謂はれて居るのであるが、即ち同社資産割合から謂ふと七分見當の損害で、之を同社の社勢全體から觀ると輕微の被害に過ぎぬ、之が損害の補塡は別途積立金八百五萬圓の内から補充するであらう。

洋紙界の前途

要之震災より被れる製紙會社の被害は他の被害に比し割合勘なく富士、王子の二大會社の復舊も上述の如く容易であるし生産能力に何等の影響がない。

更に洋紙の需要は此の事變の爲に相當增加するから斯界の前途は悲觀

したものでない。

第九章　強調景況なる肥料界

肥料界の損害如何

震災被害が肥料界に及ぼせし影響を稽ふるに（一）東京の八大倉庫、横濱の六大倉庫保管中のもの燒失價格見積約三百萬圓（二）個人倉庫及生產者倉庫在品計四百萬圓見當で京濱間營業倉庫內に半燒の肥料が若干殘存して居る、而して燒失せし肥料の種類から云へば、硫安、硝石、豆粕、過燐酸が大多數を占め、多くは秋口需要向のものであつたから、農家筋は尠なからず之が供給に困惑し、中京及關西方面に對し商談申込も漸次增加しつゝある有樣である。

肥料會社被害は大日本肥料は關東の釜屋堀、横濱新浦島、神奈川子安の三工場が燒失し、全然能力を失つた、其月產能力は約九千四百噸と

稱せられ、同社全產能力の四割五分强を減殺したのであるから其被害程度も餘程大である。

其他のラサ島燐礦は本社事務所も工場も無事で、却而震災の爲に從來の立場を一變して活路を得た形で、目下肥料の不足に對し極力生產力を增加して居ると云ふ有樣である。尙爾餘の會社も何等被害を蒙らなかつた從而此等會社は何れも製造を開始し、在荷は潤澤になつて居る

肥料需給大勢

莫大の在庫品の消失は、震災前の供給過剩を一掃された譯で、隨而關東筋農家の需要は一時に需要時期到來と品不足との爲に生じ、窒素肥料の如き大拂底を告げて居る、それ故相場も震災前の夫れに比し、七貫五百匁入高度物一叺一圓四十錢見當の弱保合であつたが、最近には一圓八十錢となり四十錢高値を呼んで居る、然しながら阪神の在荷品は豐富でもあり、旁々輸入硫安も曩に神戸に多額入荷し、硝石も阪神在荷と最近輸入品とを合計

し一萬噸内外はある、豆粕も燒失したものゝ農家筋の手當もあり又一方大連には内地向の豆粕は積荷多量にて追々輸送せらるゝ時期も來る模樣である、更に過燐酸は各會社とも供給製產充分である等内外の此供給大勢上より觀て、一般需要の解決に苦しむ樣なことはあるまいと觀察せられて居る。

肥料界の前途

然しながら肥料界は製產品と云ひ、輸入品と謂ひ、各種の種類を通じ、硫安に於ても、過燐酸に於ても、硝石に於ても、豆粕に於ても一方に燒失せるもの多量を算し、加ふるに需要季節に到來して居る關係上、縱令供給力に不足を來たすに至らない狀態にあるとは謂へ、需要に對する供給は動もすれば、運輸上供給に幾分の遲延を來たすとか、或は遠距離輸送、乃至輸入加勢の爲めに、市價は勿論强調を加へ來り、相場は當然上向く形勢を辿り隨而斯界の前途も從來の不勢を一變して活勢轉化を呈するものと想像せらる。

第十章　巡機待ちの石炭界

石炭の被害高

今回の震災事變より受けたる石炭界の損害高は割合に輕微にて（一）東京貯炭所たる、石川島、芝浦、築地、隅田川、小名木川其他等で貯炭高十五萬噸（二）横濱は總計五萬噸で合計二十萬噸の在荷中其大半は災害を免れ、燒失したる量は三萬三千噸内外の見當であつて、京濱の總貯炭高に比較すれば之が被害は一割八分である。

燒失石炭量

貯炭場	燒失高
石川島	二、〇〇〇噸
芝浦	—
築地	四、〇〇〇
合計	三三、〇〇〇

貯炭場	燒失高
隅田川	一、〇〇〇噸
小名木川	一〇、〇〇〇
横濱	一六、〇〇〇

卽ち京濱の石炭燒失高は前記表の通りで之を全國總貯炭高百三十三萬五千噸に比するときは僅に二分四厘の損失に過ぎぬ、而して之が損害額は炭價噸當り二十圓とすれば、之が損失高は六十六萬圓見當のものである、而して京濱一ヶ月の石炭消費量は三十萬噸、本邦總消費高の丁度一割を占めて居たが、震災前の東京工場數は六百六十三工場で事變の爲に倒壞又は燒失せる工場數二百八十一卽ち總數の四割二分三厘なる工場を減滅することになつたであるから、全體の消費量も當然減量し約十四五萬噸の需要減を來たしたと見るのが至當であらうから、此方面の需要減よりする損失も加算するときは、相當多額の損失と云はなければならぬ。

石炭需要と前途

斯界は本春來貯炭增加の爲め市價兎角不勢を示し居り縱令向後需要期に入り、又關西筋に於て、關東被害の代位需要を行ひ得る關係にありと云へ、炭礦筋は出產增加に力を入れつゝあれば、全體の需給關係に何等支障なきに終る可き形勢にもあり、旁々市價は向後兎角軟弱の步調を辿る可く豫想せられつゝあれば、關東筋需要の激減と相俟つて、斯界の前途は財界が活勢轉化の時期に到達するまで一巡待の時日を要すものと觀ぜられつゝあるのである。

第十一章　需要相當ある石油界

日石の被害高

事變より受けたる日本石油の被害は、本社建物、業平橋、隅田川兩倉庫の燒失と、倉庫貯藏の製品三萬箱喪失であるが、本社建物は破損も輕微で、右兩倉庫の燒失及製品兩損として約四五十萬圓見當の程度のものであらう、然し同社は震災後ガソリンの賣出を行ひ、一方經費の節約もなされ、購入外油七萬噸の値上益も見込で居り且別途積立金五百六十二萬四千圓の外保險

塡補準備金百七十八萬七千圓合計七百四十一萬一千圓なるものがあり震災に依り一方貸倒れや損害があつたにせよ、何等社勢に影響するものでなく、向後も依然斯界の雄として商勢を馳するであらう。

關稅免除と石油前途

現在內地市況としては揮發油は目下震災地の整理の爲め自動車用の需要が莫大で既に燒殘りの東京隅田タンク（日石）の一萬箱、大阪ライジングサン、スタンダード、日石販賣出張所から各一萬箱徵發又は買上濟で其上產地新潟縣に對しても政府より賣止めを命ぜられて居る有樣であるから此儘としては揮發油は異常の品不足を告げ、近々各地の自動車運轉及諸產業の經營にも差支へる形勢であるから揮發油の關稅免除は焦眉の急にて燈油は全國に在荷潤澤であれば關稅が免除されても輸入はあるまじく、輕油は靜岡、京濱に徵發された漁船の需要多く產地よりの供給絕へて居るし關稅免除されゝば市價昂騰を牽制する効が相當にあらうと稱せられて居る。

斯く觀察して來ると石油界の前途は寧ろ樂觀に値すべきと觀るのが穩當であらう。

第十二章　混沌裡中の酒造麥酒　釀造界

第一節　混沌裡中の酒造界

酒の燒失損害

東京及橫濱の各店及倉庫品で持越しの酒が燒失又は流失した量は約五萬石見當と概算せられ、灘五鄕だけでも其損害は一千萬圓を下らぬと看做さる、同地には四百軒の釀造元があり、其內嘉納の白鶴、本嘉納の菊正宗、山邑の櫻正宗石崎の澤の鶴、長部の大關、花木の富久娘等は何れも代表的のもので支店を東京に設けて居る位である。而して此等四百軒の釀造元の平均年產額は五十萬石を算せられ、其內四分の一の十五萬石が東京及び其他

の關東地方で消費せられる譯で、金額に見積り容器共概算二千萬圓が阪神沿線から東京方面に搬出需要せられて居る譯で、今回の損害は五萬石と註せられて居るから、東京總需要額の三分の一を失つたことになる、五萬石とせば七百萬圓見當であるが、建築物及市中各店への回收不能の貸倒れも多額にあるし、之を見込んだら三百萬圓以上あるから一千萬圓からの損害と見らるゝが、尙新酒の出廻期には間があつた爲め此輸送品が原產地に貯藏せられて居り積出前にて災厄を脫したのは幸ひとすべしである、要するに此莫大の損害より受くる影響は灘五鄕四百酒造家の最大困痛で、之が爲に右四百の酒造家は集會の下に協議の結果酒造稅猶豫運動を開始し、灘五鄕、堺、伏見の各酒造家は各地酒造家側より代表委員を選任上京せしめ、當局に之が懇願書を提出したと云ふ、兎に角現在酒造稅は年額約二億圓に達し右の要求に從へば今年度から五千萬圓を減稅することになるのであるから、政府としても此問題を如何に取扱ふか未定であるが、歲入の上にも影響する大問題であるから容易に且簡單には解決せられないであらう。

酒造界の前途

關東方面の全滅に依り酒の需要用途は勿論激減するから此方面に向けられた供給は、大半之を關西方面に於てするより外ないが、之を關西に振向けるとせば供給過剩となり、之が爲に景氣は不況軟弱に陷ることゝならう、然らばとて急激に他地方一般の需要喚起もない譯であるから、此見地から觀察を下すと酒造界の災厄困惑や多大也と稱す可きで、關東復興の時期迄減產と此損害を減稅とに依つて當面の切拔けを行はねば、中には倒產を見るが如き小酒造家の發生するやも知れずと看做されて居る、何れにするも酒造界の前途は當分不況の外なからんと觀ぜらる。

第二節　景氣盛返の麥酒界

麥酒が震災より受けたる被害も酒造の損害に劣らない、之を研究する爲に、關東の二大麥酒釀造會社なる、大日本麥酒、日英釀造の二社に就て窺つて觀ることゝしやう。

大日本麥酒被害及前途

同社の被害工場は目黑、吾妻橋、程ヶ谷三工場で其他の五工場は損害を免れた、目黑工場の損害は復舊費に約百萬圓を要する程度のもので却々大きい、程ヶ谷工場はシトロン及製壜工場とも全潰の上工場燒失した、吾妻工場は震災當初被害輕微であつたが遂に燒失した此損害概算三百萬圓、程ヶ谷工場三百萬圓とを合計し七百萬圓の損額額である。此他賣掛代金回收損と製品損失損、所有有價證券値下損とを加算し震災に依る總損失は大約一千萬圓を超過するであらう。

尙同社に於ては目黑工場の復舊に早々着手し本年末迄には應急工事を終へるらしく、既に一部作業運轉をやつて居る、又程ヶ谷製壜工場の復舊も急ぎ居り、此方面の製壜も追而供給に支障なき筈である、兎に角同社の東京分の製造能力は四割減の見込である之に對し一方復興事業の進行に連れ麥酒の需要も相當增加するから、京濱の供給力不足を來たした際、却而會社は生產力を增加せねばならぬと云ふ成行であるから、假令一千萬圓の損失を來たしたと云へ、今期利益は五百萬圓見當もあり、且積立金繰越金が千七百萬圓もあるから、此積立金の內から損失額を控除補塡するとせば、配當に於て優に三割の今期配當が得られると云ふ位ひであるから差したる困痛を感ぜず依然生產供給に任ずると云ふ譯であるから、同社の前途社勢に影響する所は少ない。

日英釀造被害及前途

同社の損害と云へば（一）下鶴見工場倒壞（二）製品燒失（三）本社建物燒失との合算で約三拾萬圓見當のものである、鶴見工場は一部の破損で損害輕微、之を大日本麥酒の損害に較べると殆ど御話しにならぬ位の損害で濟んだ又貸付關係に

於ても同社は新設會社で多く山ノ手方面が多かつた爲に是又損害の點に於て免かれ得たのは同社の爲に幸ひで、向後此震災を絶好の時機として販路の擴張を行ふことであらう、尙復興事業の進捗に伴れ京濱の麥酒需要も漸次增加するし、一方京濱の釀造供給力は、四割減となり之が復舊にも時日があるから、同社の活躍する時機は今を措ひて他にないのである。

同社の被害は前記の如く輕微であつたから、之れが復舊は容易にて差したる難問題でない。隨而京濱需要の供給力に一伸張を爲さんとせば工場機械を增設し生産力を增加するとにせば現在以上の實力を發揮するのは易い、唯問題は同社は從來歷史と地盤を擁せる他社に較べ新設會社として今日迄苦しき立場を凌ぎ來りし關係上新設會社に往々ある例として資金難の評がある、隨而此金融難の爲に當面の好立場にありながら、進んで積極的の方策を樹て難きの趣きがあるかの如く一部から觀られて居るが、此際同社は何とか方針を樹て、他社の工場生産能力不充分の折柄であり、關東筋の新販路を開拓しつゝ生産能力を增加するに至るなれば、同社の面目を好轉一新するに差したる努力を要せぬものと想像されて居る要之麥酒界全般の形勢上より觀察して麥酒は漸次需要の喚起と共に景氣は次第に盛返すものと信ずるのである。

第十三章　供給力不足の製粉界

（製粉界）
（被害高）

製粉三大會社である、日本製粉、日清製粉、東亞製粉の三社の被れる損害を窺ふに當り先づ右三社の生産能力より說いて、之が損害程度に依る操業關係とを左に順記して觀る。

（日清製粉）――（生産能力）▼横濱工場生産能力一日一千五百パーレル、▼鶴見新設工場同四千パーレル、

◎損害　鶴見及横濱工場破壊、製品七百パーレル紛失

◎完全操業經續工場　館林工場

（日本製粉）（生産能力）▼横濱新設工場生産能力一日四千パーレル、▼小名木川工場一千百五十パーレル▼砂村工場八百パーレル

◎損害　横濱新設工場燒失

◎完全操業經續工場　小名木川工場

（東亞製粉）（生産能力）▼大島第一工場生産能力一日九百パーレル　▼同第二工場同一千一百パーレル擴張八百パーレル

◎損害　大島工場全滅

以上の關係から觀ると關東筋の製粉會社工場の生産總能力に於て、從前の生産力の四分の三を減量する結果となり此生産能力減より生ずる損害は慥かに製粉會社の致命傷で他に現在に現はれたる直接損害概算百萬圓内外を合算すると製粉界の被害損失は莫大を見積り得らるゝのである。

製粉界の前途

斯く觀察を製粉界の現狀に馳すると、製粉界は茲に生産能力の新規增加を劃する復舊を急速に圖るにあらざれば、供給不足を忽ちに見舞はれ、遂に製品の品薄より生ずる强氣とを含みて、市價は奔騰することゝなる可く、更に東亞製粉の如きは既に整理未完了の時に於て此大損害を受けたのであるから、大變の痛手で向後生産力の如何をすら疑はれて居る有樣であり、日清日本共從前の復舊には鳥渡時日を要するであらうから製粉界は誠に復舊上多事なるの外なきが、製品にして供給繼續するものは、充分相當の市價を維持して供給不足を喞たれつゝ而も消化せらるゝ關係にあるから却而製粉界の前途は好望を以て迎ふるに足るが、問題は需要に對する供給が完全に實行出來るや否やの瀬戸踏みにある。

第十四章　焦眉復舊を必要とする倉庫

倉庫界の被害

震災の爲め東京及横濱の倉庫に在荷した在庫品で燒失の厄に遭つたものは、京濱十四倉庫會社保管貨物は大部分燒失した卽(一)東京の倉庫は永代橋を中心とし、深川、京橋の倉庫殆んど全滅し、深川方面の倉庫は主として穀類を、京橋方面の倉庫は多く雜貨類を保管して居た、而して七月末現在の東京八社の殘高は一億四千九十萬圓（內住友倉庫殘存八百萬圓を除く）のものが全部燒失の厄に遭つたのである。

(二)横濱の倉庫は六倉庫の七月末現在の保管貨物は約二千八百萬圓で之が全部燒失したのである尙此他荷捌き扨を加へると總額一億六千萬圓以上の京濱倉庫の損害である。

(燒殘倉庫)

而して此大災厄の襲來中にありて燒失又は掠奪を免かれたるものは大體左の諸倉庫である。

渡邊（千住月島）約二百五十萬圓▲帝國（品川臺場の特別危險品倉庫）約十萬圓▲商業（神田川）米三千七百俵、金物五六萬圓▲東神（深川）米二千七百石▲橫濱の分は火災を免れ約百四十萬圓ほどのものが殘つたが、其半數は掠奪された▲住友（京橋越前堀）約八百萬圓▲橫濱船渠、約三十萬圓燒殘り其內廿五六萬圓掠奪さる▲浪速、二百二三十萬圓

右の內住友倉庫鐵筋コンクリート建其儘にて此倉庫保管中のもの少しも損害がなかつたのは幸ひとすべしである。

尙京濱の各羅災倉庫會社は何れも假倉庫建造を急ぎ三菱、渡邊、商業倉庫等既に二十四五軒が竣成期に至つて居る。

(大阪倉庫)

次に關東震災に對し物資供給上に重大の關係にある大阪五大倉庫住友、東神、三菱、浪華、杉村の在荷激減の

(在荷減少趨勢)

趨勢の上より如何に、震災地と大阪とが密接の物資需給關係にあつたかを知る爲に左に震災前後の八月末、九月末の二回の調

査表を附し、識者の參考に供することにする。

五大倉庫八月末在荷高（品種別減少）

五大倉庫保管八月末現在高は個數六百七十四萬三千二百六十個、價格一億五千九百五十萬三千六百十四圓で前月に比し二十三萬二千八百七十二個、千三百三十三萬三千二百四圓と何れも減少を示して居る

品名	箇數（千箇）	價格（千円）	品名	箇數（千箇）	價格（千円）	品名	箇數（千箇）	價格（千円）	品名	箇數（千箇）	價格（千円）
内國米	七七九	九八九六	朝鮮米	二七〇	三二九八	綿絲	六七	九四一〇	毛糸	四	五七〇三
臺灣米	一〇	一三五	外國米	三四	三五一	雜糸	五	七一五	羊毛	九	二六三一
大麥	一	七	小麥	三	二八	麻	一	三二九	皮革	四	四二五
雜麥	一	一〇	豆類	一二五	一〇二一	和紙	一四	七〇一	洋紙	八三	七一九八
雜穀	二八	一五九	麥粉	二九	一一〇	板紙	一一	三五五	紙原料	一三三	二七六一
雜粉	四八	六四七	精糖	一三〇	三一〇五	海肥料	八	一六九	陸肥	五三四	一四一〇
粗糖	七四九	一五七六九	海産	六	一二四	人肥	一一	二三〇	鐵材	七四一	七五〇〇
乾物	一三	五四八	酒類	五	一七四	金物	二六九	五〇五五	雜金屬	一八一五	六三五九
食料品	二七	八七〇	綿織	九二三	三九七一	機械	四	二〇五三	木材	一二一	一二八五
絹織	〇一	一〇八	毛織	一一	一二四〇	硝子	一九	五九七	疊表	四	四二
雜織	七	二三九〇	實棉	〇一	三二	藥種	一六九	四三〇六	油蠟	九四	二〇六一
米棉	一四	四五八八	印棉	六五	一二一五一	鹽	三	四	雜品	一三三	八二一六
支那棉	六	七六	雜棉	一七	一二八六						

同　九月末在荷高（倉庫別個數增減）

大阪五倉庫に於ける九月末日現在の保管貨物は箇數千三百五十三萬二千二百八十箇金額一億三千六百七十一萬二千九百四十八圓で倉庫別の箇數を示せば左の如し（單位個）

	九月末	前月末比較（△減）		九月末	前月末比較（△減）		九月末	前月末比較（△減）
住友	九、八二五、八二九	七、〇六〇、七三六	東神	九四六、八〇六	△一七九、六一一			
杉村	六七一、二八七	△三三五、六七〇	浪華	七〇六、九七六	六九、三三五			
三菱	一、三八一、三八三	六二、九五一	合計	一三、五三二、二八一	六、七八九、〇三一			

更に右の評價額を同樣倉庫別に示せば左の如し（單位圓）

	九月末	前月末比較（△減）		九月末	前月末比較（△減）		九月末	前月末比較（△減）
住友	五〇、二三五、九四二	△九、五八四、三六八	東新	二一、八四九、〇一五	△四、九四八、四〇六			
杉村	一七、四〇一、二九一	△二、四七九、五四六	浪華	一七、二三〇、〇三〇	△二七七、六六六			
三菱	五〇、〇〇六、六七八	△五、五〇〇、七〇八	合計	一三六、七二二、九四八	△三二、七九〇、六六六			

即ち箇數に於て約六百八十萬箇を增加したに反して、金額は二千二百八十萬圓を激減したことは比較的價格の低廉な盤其他の食料品の箇數激增した結果に外ならぬ。

倉庫界の前途

關東倉庫界全滅の復舊は、設備の完成等に於て容易の問題ではないが、然し一方現在臨時的急施を要する物資の貯藏を期する見地からせば、之を荒廢せる灰燼地に野晒的に積荷して置くのは、商品の品質損失に於て、又紛失に於て多大なる損害で、現在倉庫の全滅に依り完全設備の保管を得られないとしても、假令假建築のものにせよ、倉庫會社決議の如く一時も速かに救恤品、食糧品、建築材料品等を貯藏せしむる方策を樹ることは倉庫業者の立場のみならず、震災地たる東京、横濱として最も焦眉の急務とする所である、倉庫業者として在荷品燒失の責任は、不可抗力の損害なれば責任なしと決議せる事項にして通るとせば、倉庫會社としても建物及設備の損害位ひに止まる譯となれば此際大に又急速に復舊に從事し此救護品の保管を引受く可きで、這は倉庫會社としての希望でもあらうし又政府及東京、横濱の府市等の正に倉庫會社を援助的意味に於て利用す可きの問題である、尙向後政府の復興事業なる大問題を前途に控へ而も遠からず各內外の產地より無限の物資が、京濱方面に輸送せらる譯であれば是非共倉庫保管を必要とする、此見地からすると、關東筋倉庫業の前途は多事多望である、又關西筋の大阪、神戸、富山、名古屋等の地にある倉庫會社の如きも震災地方に輸送す可き物資の大部分は一度原產地方より倉庫に入庫せられ、再び輸送せらるゝ譯となるのであるから、物資の出入は頻繁となり、自然倉庫業の多忙を來たす結果を見るに至るのであるから、何れとも震災に關係深き地にある倉庫業者は向後益々利益の增加を來たすことゝなり、倉庫業の前途は復興期に接近する程有望の事業として看做さるゝものとな

るであらうと信ずるのである。

第十五章　復興待兼の關東瓦斯界

瓦斯界の被害

震災地域中にあつた瓦斯會社は、東京瓦斯、東京電燈小田原瓦斯、浦賀瓦斯の四社であつて、各社共相當損害の大なるものがあるが就中東京瓦斯は其規模宏大なる丈け損害も多額にて、同社の五工場中砂町、芝、大森の三工場は破損多く、深川、千住の二工場は損害比較的輕微で作業に差支へない、此外本社建物、千住及大森の兩事務所燒失し、又貸付器具は半數を失ひ、瓦斯管は比較的被害少なく、其他貯藏物の鉛管、瓦斯メートル器、瓦斯器具等の損害の外貸營の回收難に陷りしもの等がある、其被害額は大略左の割合のものと認められる。

東京瓦斯被害見積額

建物	約三百三十萬圓	貯藏物品	約五十萬圓
機械	約五十萬圓	營業貸	約二十萬圓
貸付器具	約百五十萬圓		

即ち此外瓦斯管の損害が輕微のものがあるが之れを加へると合計大約六百七八十萬圓の總損失である、以上は同社が震災により受けたる直接の被害であつて、此他に需要減少に伴ふ販賣高激減の損害なるものがある、震災前同社の需要戸は二十五萬戸を稱せられて居たのであるが此内十一萬三千戸即ち四割五分二厘の減少である、尙之が販賣高の減收其他全體の概算は五百三十七萬圓に達し到底同社今期の利益を以てするも補充し得られない、何れにするも向後の需要は半減した譯けであつて觀れば、千二三百萬立方呎の供給をなせば足りるのであるから、隨而同社の利益とする所も半減する割合となる、假令一方に帝都復興の事業が横つて居るにせよ現在の所では瓦斯の需要は急務を喚起

するまでに至つて居らぬから、同社の復舊も向後困難の立場にある、斯く觀察すると爾餘の會社たる小田原、浦賀兩瓦斯も却々復舊は容易でないらしい、唯東京電燈は被害が比較的輕微であつたから、同社は何とか局面の展開を遠からず行ふものと想像せられて居る。

瓦斯界の前途

以上東京瓦斯の立論より云ふも、瓦斯の需要は、東京横濱の大滅の爲に、瓦斯供給の地盤たる得意を失つて居るし、先づ市街民家の大成建築期に至らざるまでは、電燈との競爭に於ても甚だ割が惡い立場にあるから、自然供給力の發展も急速の伸度擴張を爲し難い關係にある等は瓦斯會社に取り、最も不利なる點である、されば總て復興期に入る迄は當分供給は全然見込なく、復興事業の漸進に伴れ次第に擴張を執るの外なき狀態にあると觀せられて居る。

第十六章　影響少き米穀界

震災と米穀界

關東震災は突然各所倉庫の貯藏米と米穀商手持とを烏有に歸せしめたから、忽ち起つたは震災糊口用の糧食問題であつた、而も辛じて死地を脱し得たる京濱の三百萬の避難民は恐怖の爲に久しく感ぜざりし空腹も翌日を經過しては、再び襲ふ饑饉災の遭遇に對する危惧であつた、而して總ての設備と制度と機關とを一時に解滅した一大地變は、食糧の支給方法に統轄を缺ぎ兩三日時の間一粒の米麥すら咽喉に通さなかつたものは其大半以上で暗黑の世に包まれながら深刻の暗痛は全く生きた心地をしたものは勘なかつた程、飲まず食はずで震災の恐怖數日を過ごしたのである、而して無政府、無警察の狀態であつたのであるから山本内閣の成立するや恐怖と不安との一大困痛に沈淪した三百萬の震災民は、誰しも政府

の急施の速かにして切めて糧食の供給せられんことを衷心冀はなかつたものはあるまい、茲に於て山本内閣は諸種の勅令を内閣成立以來續々公布し、當面の急施救護に全力を傾注し、先づ糧食品の輸送を開始せしめ震災民の目前の餓死切迫を救ふに忠實の政策を執つた、即ち先づ大阪、神戸にある政府米の大速力の輸送の命令を發し、農商務省食糧局の阪神出張所は晝夜兼行にて震災地向積出に努力したが一方鐵道破壞の爲め、專ら海送の一路のみの送荷にて輸送兎角遲々として進まず、大阪内米五十萬三千百五十六俵外米一萬四千八百二十二俵、神戸内米三十九萬六千七十餘俵、合計九十一萬四千六百八十八俵（袋も俵と看做し）の内大阪は三日内米五萬二千五百俵外米一萬四千八百廿二俵、四日内米五萬六千八百廿二俵を積出したに對し、神戸も三日約五俵萬、四日四萬五千七百五十俵を送り結局三四兩日にて大阪神戸を通じ約廿二萬俵を震害中へ送れるに止まり其輸送力は九月三四日の兩日に於て漸く内命の四分の一を輸送するに過ぎなかつたが漸次引續き搬出し遲々ながら廻送を了した、之れに引續き他の食糧品の急送を行つて、震災民の臨時救護に任じた而して政府の此廻米五十萬石は優に京濱避難民の二ヶ月間を支ふるに於て充分であつたから、最初の不足豫想は茲に案外豫想外に震災地に米が輸送せらた、當時の食糧部發表に依れば其震災地移入米は豐富であつた。

東京米穀取引解合

震災突發の爲めに東京米穀商品取引所は燒失の被害を受け市場の立會も急遽中止せられし儘經過したが、當時の建玉を如何に處分す可きか何日頃より市場を開くかの善後策を取引所側當事者に於て數項協議せられたが結局左の如く決定發表した。

米穀取引解合條項

一、九月一日現在米穀綿絲小麥豆肥の各限月總取組玉は一定の棒値を定め總解合をなすこと

二、棒値の作製は取引員常任委員の全部建玉の順位に依り賣買各三名宛及び第一部は四名、第二部は二名、第三部は小麥、豆粕共に各二名の平委員に附託すること

三、前項の委員に依り決定されたる解合値段については各自異議無きものとしその發表と同時に解合成立と看做す

四、解合の結果取引所對取引員間の清算授受一切の實行行爲は追て財界の安定するまで延期すること

五、取引員と委託者との計算は前項に準ず

米穀取引解合値段

▲第一部(米)八月三十日引値

九月限	三十四圓三十錢
十月限	三十四圓十九錢

▲第二部(綿絲)八月三十日引値

九月限	二百三十九圓三十錢
十月限	二百四十一圓五十錢
十一月限	二百四十二圓八十錢
十二月限	二百四十二圓六十錢
一月限	二百四十二圓五十錢
二月限	二百四十二圓〇錢

▲第三部(豆粕)八月三十日引値

九月限	二十圓五十七錢
十月限	二十圓五十九錢
十一月限	二十圓三十五錢
十二月限	二十圓四十錢

(小麥)八月三十日引値

九月限	六圓四十八錢
十月限	六圓五十九錢

震災と米相場

震災勃發と同時に激需目先より米價は一時に玄米、白米共一圓乃至二圓方も奔騰を呈した爲め、政府は米價の公定相場を公布し、玄米三十六圓五十錢、白米四十二圓以下とし若し此以上に販賣せるものあるときは暴利取締令に觸るゝことゝなつた爲め相場は此處に落附きしも、震災地方にては、此米價公定相場は高過ぎるとの非難の聲もあつた、因に政府は拂下米販賣價格を左の如く公布するに至つた。

即農商務省では震災地に於ける米販賣に關する要項を左の如く決定し九月十七日公表した

一政府米拂下相手方

官廳、東京府、神奈川縣、東京市、横濱市、深川廻米問屋組合、神田川米穀市場組合

一拂下米は内外米に區別しあるも銘柄等級は區別せず

一一口拂下數量

内地玄米石百三十四圓但九年十年度産米は石二十八圓

内地白米石三十九圓五十錢

外米一袋十二圓

一小賣商人の政府拂下米小賣價格

内地玄米石三十六圓五十錢

九年十年度産米は三十圓五十錢以下

五十俵以上　　内地白米石四十二圓以下
一政府の拂下價格は下記の通り　　外米一袋十三圓五十錢以下

米作影響と其前途

本年の米作第一回豫想高は五千八百二十五萬餘石で前年度より四分の減少であるけれども平年作よりは幾分の增收であるから大勢の上に於て、差したる米價に影響する所のものはないが、唯震災地方の向後の需要見越が依然去らないのと今一つ諸物價は震災前の夫れに比し、均しく高値を支持して居る有樣であるし、假令公定相場の標準價に支配せらるゝとは言へ、一般經濟界が震災復舊の景氣氣分を受け、復興用の諸品は兎角市價上騰の狀を更めず、暴利取締令の手前一定價格以上の騰貴は遠慮せられて居るも自然需給の調節を缺ぐあらば、勿論供給力薄弱の爲に市價は低落すべきものでないから隨而强調を唱ふるばかりである、米穀に於ても此見解の通り向後の需要見越しと移動と一般經濟界の刺戟とに依り、市價低落は今の場合豫想出來難い譯で一時低落氣味にあつても當然公定相場近くに落附く市價を支持するものと思はれるのである。

第十七章　好勢轉化せる化學工業其他

染料界

我が染料界は戰後久しく不振の狀態にあつたが、震災と共に硫化染料界は俄かに復活の氣分横溢するに至つた、而して休業工場も追々操業を開始し又は準備中である、硫化染料の好轉に連れ硫化曹達の需要も增加の傾向を呈した對支輸出に於て硫酸も擡頭の氣味を呈し、殊更支那市場に於ける獨逸染料の活躍は大に我染料業者を奮起せしむるに足り旁々、染料界一般を通じ復活の氣を現しつゝある、震災地たる東京は從來其硫化曹達生產力の半ば四五百罐を大阪に供給しつゝあつたのであるが、震災の結果、工場は被害なかつたが砲兵工廠の被害の爲め原料硫酸曹達の供給半減し生產力も半減の見込なれば

市場品薄の有樣であるが、關西筋に於ては東洋染料が操業を開始したを初として尾崎染料も硝酸硫化曹達等の原料を買入れ操業を開始する事となつた、尙小川染料も今春の安値石炭酸を手持してゐる關係上近く操業開始すべく硝酸其他の原料手當を行ひ、一時帝國染料の鳴尾及福山工場を除いては殆んど全滅の姿にあつた硫化染料工場も多少ながら回復して來た而して同時に市價も强調を示しつゝある。

染色業 染色業も震災と同時に和歌山方面の綿ネル捺染業活況に入らんとし、其他全國綿布類の七割を染色する京都方面の染工場は震災にて綿製品の在荷大部分を處分して終つた爲め活況を呈し、更に支那日貨排斥の緩和により最近綿糸布の對支輸出商談增加したゝめ輸出物を取扱つてゐる染色工場は漸次活氣付き大阪染工の如き晝夜とも作業するに至つたが、其他の染工場も東京の被服廠の燒失により近く被服品の註文大阪に寄せらるべきを豫想し稻畑大和川及大阪染工の如きは註文引受けの準備を行つた模樣で、久しく極度の不振を訴へてゐた染色界も多少活況を呈して來た。

晒粉業 今回の災害を蒙つた關東方面の晒粉工場は大日本人造肥料の王子工場、北豐島郡の旭電化、横濱の保土谷曹達及横濱化學、靜岡の富士、水電等でこれ等最近の生產高は月三百萬封度內外であつた、併し晒粉會社は全生產高を八百萬封度とし七八九の三箇月間一割五分の生產制限を行なひ月約六百萬封度を生產してゐたが產額の三分の二を生產する關東方面の工場が全部震災に罹り、燒失又は倒壞して生產能力の激減せる結果著しく供給不足となり、且つ從來のやうに關東方面の會社が過剩品を關西市場で投賣する處がなくなつたので關西側製造業者の態度硬化することゝなり各會社共全能力を發揮して操業を開始し關西方面は月五十萬封度見當の增產を見るべく觀測されてゐる。

銅加工業　銅製品中、銅板類は原料電氣銅漸落と需要不振とにより八月以降生産制限率を高めるの傾向にあつたが、今回の震災以來操業短縮を撤廢し前途一時的にも需要の增加すべきを豫想して其準備に着手してゐる所多く漸次活氣を呈せんとしてゐる。

製藥業　東京及横濱の藥品界は市内の藥種商及製藥所の燒失で醫藥は大缺乏の狀態で、震災應用筋に向けられた藥品のみでも多額の藥價量に上り、之等は東京衞生試驗所が幸ひ震災を免れ其持合せの藥品が全部避難民救護用に應用せられしものゝ外、岐阜、德島、兵庫、長野、三重、鳥取及び大阪方面よりの廻送藥品に依りて、應急施藥劑に振向けられ、震災用として其量豐富であるから、震災地の臨時用の醫藥劑としては何等不足を告げて居らないが藥種商及製藥工場の燒失に依る藥劑の激減は到底從來の市中在荷品のみにては需要增加に依る品薄の爲めに、供給不足の有樣で、殊に醫藥品外の工業藥品の如きは同樣品薄の狀態であるし、賣藥は全く藥店燒失に依り震災地にて其影を沒し需要し度くもないので、東京の賣藥組合は大阪筋各製藥業者に對し續々註文を發し來り、之が爲に大阪筋同業者は大多忙を極めて居る一體東京では一ヶ年どの位の製產能率があつたかと云に二千四百萬圓あつたが之が九分迄燒失したので手も足も出ない大阪は一箇年二千二百萬圓の產額で中二百萬圓は海外輸出二千萬圓は內地消費であるが非常時とあつて四百萬圓の製品がうづ高く積まれてゐる有樣である。

第十八章　窮境に陷れる保險界

第一節　行詰れる火災保險界

火災保險被害巨額

關東大震より受けた被害中何んと言つても火災保險會社が一番廣汎で、然かも其損害塡補責任とせらるゝ額も巨大のものである、斯界の被害に就ては餘りに範圍廣汎

に渉り居る爲め之が被害高の調査も俟ち〳〵であるが、其内最も事實に近いと認めらるゝ火災保險聯合會の調査に基くものに依り窺ふに、三十二社の火災保險會社の再保險契約を除き、更に千葉、靜岡両縣の被害を控除し「東京市、東京府郡部、横濱市及郡部、横須賀市、小田原町、神奈川縣郡部の元受契約の罹災保險金總額は十四億三千百十一萬六千圓にて直接被保險者と外國保險會社との元受契約額は三億五千萬圓、聯合會協定以外の動産及不動産契約保險金額五社分、合計一億六千萬圓に達し、此内外國會社は全然支拂義務なきを聲明して居るから、此三億五千萬圓を引き、政府の補給に對し交渉中のものは十四億三千百十一萬六千圓と協定以外の一億六千萬圓の總計十五億九千餘萬圓である。

尙此他三十二社外の十四社の再保險會社分の七億二千萬圓を加算すると全體の火災保險の總損害額は二十三億一千萬圓に達する譯である

燒失會社

次に震災の爲めに東京に本店及支店を有して居る火災保險會社中建物の全燒又は半燒により損害を蒙つたものは大略左の如きものである。

東京火災　帝國海上　大正海上　福壽火災　神戸海上　日章火災
日清火災　共同火災　内外海上　大和海上　中央海上　横濱火災
千代田火災　大東火災　大東海上　日東海上　太平洋海上　神國海上
大阪海上　東京海上

等二十社で明治火災と日本火災は燒失を免れた、此内東京に本店を有するものは東京火災、帝國海上、大正海上、日章火災、中央火災、千代田火災等で横濱火災は横濱に其他は大抵大阪と神戸、名古屋に本店を有して東京は支店又は出張所に止まるものである。

契約減少

今回の震災による火災保險會社としての損害は、被保險者に全額補塡の義務がなくて單に未經過保險料支拂に過ぎないとすれば左程大した問題でない如く思はれるが

決してそうでない、自己の會社建物の燒失もさる事ながら東京及び横濱の大會社大工場全滅により今後の保險契約高の減少である、今此大勢を見るために左に全國七大保險會社の十一年末全國火災保險契約高を記せば左の如きものである（單位千圓）

	契約高	資本金		契約高	資本金
東京火災	七三、〇〇〇	一〇、〇〇〇	明治火災	一、一三〇、〇〇〇	一、〇〇〇
共同火災	七六九、〇〇〇	一〇、〇〇〇	日本火災	一、三三六、〇〇〇	三、〇〇〇
横濱火災	一、一五二、〇〇〇	二三、五〇〇	東京海上	一五九〇、〇〇〇	三、〇〇〇
千代田火災	五三八、〇〇〇	一〇、〇〇〇			

之等の契約高は全國に亘つてゞあるから此内何割までが東京及横濱において有するかは不明だが、何れも東京を本據としてゐる關係上其契約高の二割乃至三割は本店において保有するものと見ねばならぬ、而して向後從前の契約高に相當する堅牢な建造物の再造は到底覺束なく、それだけ保險契約高において減少するものと考へねばならないと思ふ。

震災地所在火災保險のを擧げれば左の通りである。

東京及横濱に本店を有する火災保險の總體の主なるも

	資本金	本店所在地	設立年月		資本金	本店所在地	設立年月
	千円				千円		
明治火災	一、〇〇〇	東京	明治二四年一月	千代田火災	一〇、〇〇〇	東京	大正二・七
日本火災	一〇、〇〇〇	同	二五・四	第一火災海上	五、〇〇〇	同	六・一
横濱火災海上	二三、五〇〇	横濱	二一・二	三菱海上火災	五、〇〇〇	同	八・二
東京火災	一〇、〇〇〇	東京	二〇・七	大平火災海上	五、〇〇〇	同	八・八
帝國火災	一〇、〇〇〇	同	四五・四	東神火災	五、〇〇〇	同	九・一
東京海上火災	三〇、〇〇〇	同	二一・三	千歳火災	五、〇〇〇	同	九・八
東邦火災	三、〇〇〇	同	四四・二	東洋火災海上	五、〇〇〇	同	九、二
帝國海上運送火災	一〇、〇〇〇	同	二六・二	東京動產火災	一、〇〇〇	同	七・六
資本合計	二五九、〇〇〇						

卽ち前記各社の標榜資本合計は一億三千九百萬圓となつて居る。

震災と保險會社責任

關東の全滅は所謂之が「建物の全燒であつて、火災保險の目的物が燒失したのであるから火災保險會社は結局左の營業被害を蒙る譯のものとなつた。

（一）關東復活まで營業地盤を失ふ

（二）保險金の支拂問題を如何にすべきや其如何にするも責任は重大であること

即ち關東復活は向ふ三ヶ年後とせられて居るのであるから此間會社は營業地盤なるものゝ大半を失ひ復舊後と雖新規に契約をなすに於て大なる努力と經費とを支拂はねばならぬことゝなつた、又現在の保險契約による損害額は十九億四千萬圓で、彼の保險約款第十七條第五項に基く「原因の直接と間接とを問はず、地震又は噴火の爲に生じたる火災及び其延燒其他の損害」には塡補の責任なしとして居る明文を楯に全然責任なしと主張すれば、現在の被保險者を無視するばかりでなく斯ては保險契約者を激減し向後の存立を自滅に陷らしめるやうな結果となる譯で、然らばとて之が一部の支拂を實行するだに會社は現資產を以てしては到底不可能の所謂苦し痛しの板挿みの狀態で、關東側會社が協定を關西側會社に求め、幾度かの協議を遂げ、又政府筋に保險金支拂に對する救援を乞ふ等火災會社は難問を抱いて全く四面楚歌裡に立つたのは無理からぬことである。然しながら最近に及んで、東西火災保險會社の協定も接近し或は契約金の一割支拂に決定を見る形勢に趨かんとするも未定にて之に就ては井上藏相は大體保險金支拂總額が一億五千萬圓と決定するとせば本年末迄に右金額を國庫資金を以て保險會社に貸付け、年內に保險契約者に支拂はしむる意嚮らしいので之は多分公債の發行となる趣である而して保險會社にては此契約者に支拂ふ一割は見舞金なる名稱の下に各被保險者に支拂ふことに條件が東西協調の下に決定致さんとしつゝあるが、要は保險會社の實力的資

本能力の如何に歸着する問題で、此支拂は保險會社中資産の不足を來たすものが續出する譯となる、今試に一割支拂後の各社の資産狀態を左に示すことにすると。

一割支拂後の各社資産狀態

東西保險協定に基く一割支拂を實行するとして之が負擔を各社の資産の上から差引くとして觀て、關東、關西兩側の資産變動狀態は左の如くとなる。

關東側各社資産變動狀態（單位千圓）

	資本金	拂込額	拂込濟	諸積立金	見舞金	支拂後資産
東京海上	三〇、〇〇〇	三、三〇〇	三、三〇〇	五六、七九六	三、三〇〇	八三、五九六
帝國海上	一〇、〇〇〇	二、五〇〇	二、五〇〇	四、八二〇	三、六〇〇	三、七二〇
日本火災	一〇、〇〇〇	四、〇〇〇	一、三三〇	一一、三三〇	一三、〇〇〇	三、三三〇
東洋海上	三、〇〇〇	七五〇	七四〇	二、〇五〇	七四〇	二、〇六〇
中央火災	五、〇〇〇	一、二五〇	三一〇	三一〇	六五〇	九一〇
三菱海上	五、〇〇〇	一、二五〇	三、二五〇	三、二五〇	五、六四〇	不足 一、一四〇
帝國火災	一〇、〇〇〇	二、五〇〇	二、四八〇	二、四八〇	六、三〇〇	同 一、三二〇
東神火災	五、〇〇〇	一、二五〇	二六六	二六六	三、〇五〇	同 一、四九〇
横濱火災	二二、五〇〇	三、二五〇	七、八八〇	七、八八〇	二二、五〇〇	同 一、四九五
東邦火災	三、〇〇〇	七五〇	八〇〇	八〇〇	三、〇五〇	同 一、五〇〇
明治火災	一、〇〇〇	拂込濟	同	二二、〇八三	一五、六七〇	同 二、五八七
東京火災	一〇、〇〇〇	二、五〇〇	同	九、三〇〇	二二、三〇〇	同 三、〇〇〇
千代田火災	一〇、〇〇〇	二、五〇〇	同	二、九三〇	九、二七〇	同 三、八四〇

關西側各社資産變動狀態（單位千圓）

	資本金	拂込額	諸積立金	見舞金	支拂後資産
神戸海上	一五、〇〇〇	三、七五〇	七、八九〇	五、三五五	六、二八五
日本海上	一〇、〇〇〇	二、六五〇	四、四二〇	一、七九七	五、二七三
大阪海上	一〇、〇〇〇	二、七九〇	五、六八〇	四、八〇〇	三、六七〇
朝日海上	一〇、〇〇〇	二、五〇〇	五六〇	一、三〇〇	一、七六〇
大福海上	五、〇〇〇	一、二五〇	三〇〇	八〇五	七四五
大正海上	五、〇〇〇	一、二五〇	一、九六〇	二、六〇〇	六一〇
豐國火災	三、〇〇〇	七五〇	二、八九〇	四、七一〇	不足 一、〇六〇
福壽火災	二、〇〇〇	五〇〇	一、四四〇	三、五〇〇	同 一、五六〇
共同火災	一〇、〇〇〇	二、五〇〇	三、六〇〇	一〇、〇六〇	同 三、九六〇

右表は各務氏の主張する元受會社間相互の再保關係卽ち各社の買再保を除外して直接元受契約高により先づ被保險者に支拂たる場合の計算

で對被保險者支拂を先決問題として居るが關西側會社は同時に再保會社元受會社とを問はず相互の再保關係をも決定しやうといふので兩者の間に相當の距離があるのであるが何れにか之も決定のことになるであらうが唯問題は政府が右表の示す通りの資產狀態を異にせる各社に對し如何なる方針にて援助するか、又會社の提出する條件が如何なる程度まで當局の容れる所となるかの問題である。

火災保險官營論

關東の大震災に付一般罹災者に救濟支拂をなす可き最も重大の關係にある、火災保險契約に基く保險金の支拂問題が天下の大問題として提唱せられ居るが、之が保險會社の立場及資力と被保險者側の立場及要求とが反對の傾向に問題が未決の儘推移しつゝあるに對し、世間有力識者の多くは茲に、火災保險の官營論を唱道するもの增加の有樣となつた、要するに這回の如き未曾有の大災害に對し、保險會社の責任問題より延ひて保險金支拂問題の解決難を云爲せられ、又保險會社として保險金の漸く一部支拂位のことに其存立如何を提唱せらるゝやうでは、政府も此大震災に鑑み將來斯くの如き場合に處する爲に何等かの方針の下に相當の方法を講ずるに至るであらうし、此見解からして保險官營は早晩實現す可きが當然と考へられる。

第二節　經營難裡の生命保險界

震災死亡と直接的損害

關東の震災は東京、横濱其他を通じ死亡者十萬以上に及んだが之れが全部生命保險契約者と云ふ譯でないから、其內一部分の契約者として最初、生命保險各會社では、保險金支拂額も相當巨額に上るならんことを豫期し、東京横濱に本社を有する四十七生命保險會社は第一生命相互保險會社の矢野恒太氏を代表とし、四十七會社の全財產約六億五千萬圓を擔保とし、日本銀行

より五千萬圓の借入を乞ひ、其融通に依り、東京横濱の被保險者約三百萬人之が契約高六億圓の中死亡者を百分の五の十五萬人と推定して保險金の支拂に充てんとしたのであるが、九月一日震災より十月十五日迄に於ける內地四十二社生命保險會の震災に由る燒死又は震災の原因に基き發病後死亡したる被保險者で屆出でたる保險金額は三百五十一萬二千五百圓にて、內支拂金額は百六十萬二千圓であるから、之れを各社割にすると其支拂額たるや最初の豫定の幾分の範圍に止まつて居るが、何れ此保險金の支拂は次第に增加するとしても、此方面の支拂は割合に少額に止まるやも知れない模樣であるから、保險會社として差したる痛困でない譯である。

生命保險の間接的損害

生命保險會社の損害は表面死亡拂戻しの額多額に上るべしとせられたもの全く小額に止る形勢だが生命保險會社の損害は此死亡拂戻しの方面でなくて、事實は其裏面

とする所謂不動產貸付の擔保品燒失に依る間接の損害其物である、今此貸付上の齎らす各社の損害の內容如何を左に窺ふて觀ることゝする。生命保險會社が其の抱擁する莫大の積立金を單に死亡保險金拂に充當するのみならば會社は巨額の剩餘金を死藏して徒らに零細なる銀行利子のみを利得して行くに過ぎぬであらうが到底銀行預金のみに死藏せしめ居ることを許さない、其處で有り餘る遊金は全部を擧げて有らゆる事業に投資し若くは團體に個人に有利な條件を以て貸付けられ其間少からぬ利潤を取得してゐるのである、而も其の貸付金なるものゝ大部分が土地建物其他不動產を擔保として行はれてゐるのであるから會社の巨額の金は凡てが擔保品と早替りしてゐる譯である、然るに突如として突發した大震災の爲めにそれらの擔保は跡方もなく破壞され盡し焦土と化したのだから會社は無擔保で以て貸付を行つたと同じ形になつて了つたのである、勿論それが全部會社の損失となるべきもので

はないが、少くとも後日に至つて種々の紛爭の原因を作り之れが解決を完了するまでには幾多の日子を費さねばならぬことに疑ひはあるまい、さすれば直に目前の損害と云ひ得ないまでも其の資産の上に莫大な影響を及ぼすことに異論ない處である、而して實際數字は不明なるも、少なくも二億圓以上の貸付が行はれて居るであらう、故に生命保險會社の被害は殆ど大部分此方面の間接的損害で、向後各社が此方面の擔保價格燒失の損害を如何に處置するかゞ、實際生命保險會社の致命傷と云はねばならぬ、次に又生命保險會社の向後危惧する所は此他に契約解除の增加せざるやの一事である。而して貸付金を如何に回收す可きかには又何れ難問が續出するであらう、試に左に大小十五社に就て貸付金並に有價證券所有高を比較して研究の資料としやう。

各社貸付金及有價證券所有高

（大正十一年末現在）

社名	貸付金	有價證券	社名	貸付金	有價證券
日本	二五、一一五千円	五三、八七一千円	大正	二、三九六千円	三、二五九千円
明治	五、四二〇	三〇、八六一	愛國	一、六九九	八、三三六
帝國	一三、〇六九	二二、七三九	仁壽	三、八四九	八、八六四
大同	一一、三三七	九、六〇七	日共	一、三三五	六八三
日清	二、九六二	四、七八三	横濱	一、三〇〇	四、三二五
東洋	八六七	四、五七五	日之出	三六二	三、一八七
共保	三、六五一	五、八四七	福壽	一、五一三	一、九五八
萬歲	一、〇二二	二、五二一			

第三節　影響少なき海上保險界

海上保險被害及前途

罹災の影響を受けたる海上保險の被害程度なるものは之を火災、生命の被害に比較すると勿論輕微的の範圍に止まるもので、震災當日横濱港に於ける船舶の燒失又は同港に陸揚中のもの及び既に陸揚濟のもの、受入貨物と京濱間に所在の貨物等で、之が海上保險契約は約一千五六百萬圓見當で、而して罹

災被害高は約一千萬に達してゐる模樣であるが、右罹災被害に對しては海上保險會社は當然支拂の義務あるものであつて、之が各契約會社は震災後被害の査定を行ひ、契約者に之が支拂を爲す可く手筈を進めて居る樣であるから、海上保險に於ては、火災保險の如き問題も起らず早晩完全に保險金支拂も實行せられるものと思はれるのである。

右の狀態であるから關東の震災に依り被つた海上保險の損害は洵に輕微の範圍に止まつたのであるから、隨而海上保險會社は差したる影響を受けず、更に向後關西方面を始め北海道其他地方より震災地方に輸送する多量の物資に附する海上保險契約の增加並に米國其他の海外より內地に輸送せらるゝ物資に附する海上保險の契約をも增加する趨勢にあるのであるから海上保險會社の利益は大に增加するであらうと信ずる。（完）

大正拾貳年壹月廿五日印刷
大正拾貳年拾貳月參日發行

【定價金壹圓八拾錢也】

著者　池內幸親
東京市京橋區南八丁堀二丁目一番地
合資會社小西書店代表社員
發行者　小西榮三郎
大阪市北區上福島二丁目六七七番地
印刷者　村松茂
大阪市北區上福島二丁目六七七番地
印刷所　株式會社大阪國文社
電話土佐堀七五番
振替口座大阪二八三三番
發行所　東京市京橋區南八丁堀二丁目一番地
合資會社小西書店
電話京橋二二〇三番
振替口座東京四〇〇番

終